秋田県文化財調査報告書第111集

土井遺跡発掘調査報告書

――山村基幹農道整備事業八森地区埋蔵文化財発掘調査――

1984・3

秋田県教育委員会

序

本県には，私達の祖先が営々として築きあげてきた貴重な文化遺産が数多く残されています。秋田県教育委員会では，文化財保護の立場から開発事業側と協議し，鋭意その保存に努めております。

このほど，秋田県農政部によって山本郡八森町地内で進められている県営一般農道整備事業が土井地区で実施されることになりました。このため，事前に計画路線内の埋蔵文化財の分布調査で判明している土井遺跡の発掘調査を工事に先立って実施いたしました。

その結果，平安時代の竪穴住居跡や土壙，土師器，須恵器の土器などが発見されました。

本書は，この発掘調査の成果をまとめたものでありますが，埋蔵文化財保護への御理解と能代・山本地方の郷土の歴史解明に御活用いただければ幸いです。

最後に，この調査に御協力いただきました秋田県農政部，山本農林事務所，八森町教育委員会はじめ関係機関各位，並びに，調査及び本書作成に御指導いただきました関係者の方々に厚く御礼申しあげます。

昭和59年３月31日

秋田県教育委員会

教育長　斎　藤　　長

例　　言

1．本書は，山本農林事務所の山村基幹農道整備事業八森地区昭和58年度事業実施に伴い，山本郡八森町字土井29番地に所在する遺跡の一部が計画路線内にかかり消滅することから，記録保存を目的に発掘調査を実施した土井遺跡の記録である。

2．調査は，昭和58年6月13日から6月17日まで実施した計画路線内遺跡範囲確認調査の結果をふまえ，950㎡の調査予定面積で同年8月8日から9月10日まで実施したが，最終的には975㎡を発掘調査した。

3．石器・剥片・岩片の石質鑑定は，秋田県立博物館嵯峨二郎学芸主事にお願いした。

4．本書の第5章「自然科学的分析調査」は，本遺跡検出の試料を，木越邦彦（学習院大学）・三辻利一（奈良教育大学）・庄子貞雄（東北大学）・工藤英美（八森町立観海小学校）の各氏に分析をお願いしたところ，分析結果や玉稿を賜わったものである。このうち工藤英美氏の玉稿は第2章第3節に「土井遺跡周辺の地形・地質」として掲載した。

5．本書に掲載した地形図は国土地理院発行5万分の1「岩館」「中浜」「能代」「「羽後浜田」「森岳」図幅と，八森町発行5千分の1地形図である。

6．遺跡付近の航空写真はアジア航測㈱から提供されたものである。

7．本遺跡の発掘調査・資料整理に際し，次の諸氏から御教示を賜わった。記して謝意を表する。（敬称略・順不同）

町田洋（東京都立大学理学部）・三辻利一（奈良教育大学）・佐々木達夫（金沢大学文学部）・庄子貞雄・山田一郎（東北大学農学部）・新井房夫（群馬大学理学部）

工藤英美（八森町立観海小学校）・進藤秋輝（宮城県多賀城跡調査研究所）

遠藤正夫・成田滋彦・春日信興・工藤泰博（青森県埋蔵文化財調査センター）

武田孝義・小林喜兵（秋田県文化財保護指導員）

8．本遺跡の発掘調査に際し，次の諸氏から種々御協力いただいた。記して謝意を表する。（敬称略・順不同）

加賀康三　　亀田榮子　　鈴木フサ

目　　次

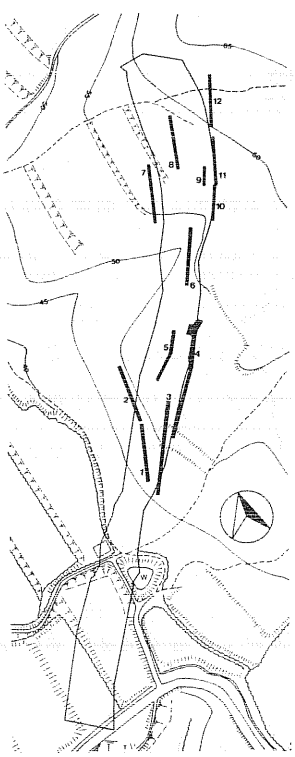
第１章　はじめに……1
　第１節　発掘調査に至るまで……1
　第２節　調査の組織と構成……1
第２章　遺跡の立地と環境……2
　第１節　自然的環境……2
　第２節　歴史的環境……2
　第３節　土井遺跡付近の地形・地質……工藤英美……3
第３章　調査の方法と経過……11
　第１節　調査の方法……11
　　１．調査区の設定……11
　　２．発掘調査方法……11
　第２節　調査経過……12
第４章　検出された遺構と遺物……13
　第１節　遺跡の土層……13
　第２節　検出遺構と遺物……14
第５章　自然科学的分析調査……45
　第１節　学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書……木越邦彦……46
　第２節　八森町土井遺跡第２号竪穴住居跡採取火山灰同定結果……町田　洋……47
　第３節　土井遺跡の火山灰……庄子貞雄・山田一郎……47
　第４節　土井遺跡出土火山灰蛍光Ｘ線分析……三辻利一……50
第６章　まとめ……54
　第１節　遺　構……54
　第２節　遺　物……55
　第３節　火山灰……56
　第４節　成果と課題……56

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまで

昭和56年度から事業が実施されている山村基幹農道整備事業八森地区計画路線内に埋蔵文化財が包蔵されている可能性があるとして，県農政部山本農林事務所から県教育委員会へ埋蔵文化財調査についての依頼〔昭和58年５月27日付，山本農林事務所長から教育庁文化課長あて，山農—475埋蔵文化財の調査について（依頼）〕があり，６月13日から６月17日まで５日間にわたって，県埋蔵文化財センター桜田隆文化財主事が池田洋一調査補佐員と作業員15名で，総延長 311 ｍ，最大幅25ｍの路線内に12本のトレンチを設定（第２図）し，遺跡の性格，範囲を把握することに努めた。５月26日の日本海中部地震の余震が続いているせいか，雨中にもかかわらずマムシが至る所でとぐろを巻いており，調査に支障があったものの，段々畑部分と尾根南側斜面に設定したNo.３～No.５，No.７，No.９，No.11のトレンチで遺構（竪穴遺構，かまど，溝状遺構他），遺物（旧石器，縄文時代石器，土師器，土製支脚，陶磁器，鉄滓他）を検出し，旧石器・縄文時代，平安時代集落，中世館跡の複合する遺跡であり，調査を要する範囲は２地点950㎡と推定した。

この結果に基づき，県教育委員会と山本農林事務所が協議し，既に計画に従って農道が建設されており，路線変更が不可能であることから７月着工予定を延期して，発掘調査を８月８日から９月10日まで実施し，記録保存をはかることとなった。



第２図　範囲確認調査における
トレンチ配置図

第２節　調査の組織と構成

調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	桜田　隆（秋田県埋蔵文化財センター文化財主事）
調査補佐員	池田洋一　大高博康
調査作業員	金田美貴子　金田金代　工藤セチ　金田リサ子　戸松スミ 吉田栄子　工藤レチ子　菊地リヤ　石崎　緑　須藤キサ

	菊地蓉子	鈴木ヨシエ	小山内政子	鈴木ミツ	丸山愛子
	成田ルエ子	桜田カヂ	石岡キクノ	佐藤トシ	北林チサ
	佐々木京子	山内トメノ	石上マサ	山本チヨ	藤田志摩子
	菊地浩晃				
整理作業員	高階恵子	進藤里美	長谷川順子	高橋フサ子	継田タツ
	山田美喜子				
調査協力機関	秋田県農政部山本農林事務所	山本郡八森町教育委員会			

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　自然的環境（図版１）

秋田県北部日本海沿岸に位置する八森町は，大部分が山地であり平野部は海に面する砂丘・沖積地と段丘面にみられる。この平野部も広い南部の八森地区でさえ幅が１kmと狭く，北部に至っては海に山地が押し出している趣を呈する。

土井遺跡は，八森地区の東側，薬師山の南麓で段丘上に張り出す尾根の南斜面に位置し，北緯40度20分，東経140度３分である。遺跡前面に段丘面・砂丘・沖積地が広がり，現汀線までは1.25kmの距離がある。遺跡の南側には上の川が流れている。晴れた日には男鹿半島が眺められる。海と山に囲まれているため食糧資源には恵まれている。

第２節　歴史的環境

土井遺跡の所在する八森町は大部分が山地であるため，原始・古代・中世の遺跡は海岸線近くの段丘上に立地している（第１図）。

小入川(1)，立石(3)，姥子山(4)，本館(8)は縄文時代の遺物包蔵地として，五輪台(5)は平安時代の遺物包蔵地として知られている。木戸の沢館(2)，篠森館(6)，本館Ⅰ(7)，本館(9)，小母谷台館(24)は中世城館として知られている。段丘を南下すると，県北部を横断する米代川が流れている。この米代川の両岸に広く発達する台地の縁辺部には数多くの遺跡が存在する。

旧石器を出土する遺跡としては，ナイフ形石器を出土した落合遺跡(25)，掻器を出土した古館遺跡(26)，杉久保型ナイフ形石器を出土した館下Ⅰ(13)，米ヶ森型台形石器等を出土した此掛沢Ⅱ(20)があげられる。

縄文時代の遺跡としては，杉沢台(11)，館下Ⅰ，真壁地(14)，柏子所貝塚(23)があげられる。弥生時代の遺跡として真壁地遺跡があげられるが，遺物が散布するにすぎない。

平安時代の遺跡は非常に多く，サシトリ台(10)，ユズリ葉(12)，杉沢台，竹生(15)，大館(16)，上の

山Ⅱ(21)，腹鞍の沢(22)があげられる。上の山Ⅱは土井遺跡例と同じ降下火山灰が竪穴住居跡から検出されており，遺跡相互の比較検討のできる好例である。

日本書紀斉明天皇４（658）年夏４月条の阿倍比羅夫の遠征記事が，能代・山本地方の史書の初見であるが，その後，元慶２（878）年の所謂元慶の乱には「野代」の蝦夷が参戦していたことが三代実録元慶２年７月10日条によって知ることができる。

記録されている古代の天変地異は多いが，天慶７（944）年甲辰の秋８月の大地震で土井遺跡の北方800 mの地にあったとされる河堂村と宝塔寺が崩壊・埋没したという伝承もあり，遺跡の年代観に近いところから興味をひかれる。

中世に入ると桧山安東氏城館跡(18)のような中世城館が，尾根や台地を堀割区画して数多く築かれている。この城館の中には古代の所謂蝦夷館を利用したものも含まれるであろうが，中世後期に抬頭してくる地侍層の村落単位の館も多い。

中田面(17)のような集落跡，茂谷沢（エヒバチ長根）窯(19)のような中世窯も確認されている。

中世の能代・山本地方は，大陸・半島との交易の北の拠点，十三湊の支配者安東氏の影響をうけていたと考えられる。特に興国２（1341）年とされる大津波による十三湊の壊滅と安東氏の南進が沿岸各地に多大な影響を与えたことは想像に難くない。

第３節　土井遺跡付近の地形・地質

工藤英美

地形・地質概略

当遺跡は能代平野の北縁にあたる丘陵末端部に発達する段丘上にある。この丘陵地は白神山地の南端にもあたり，山地が海にせまっている。

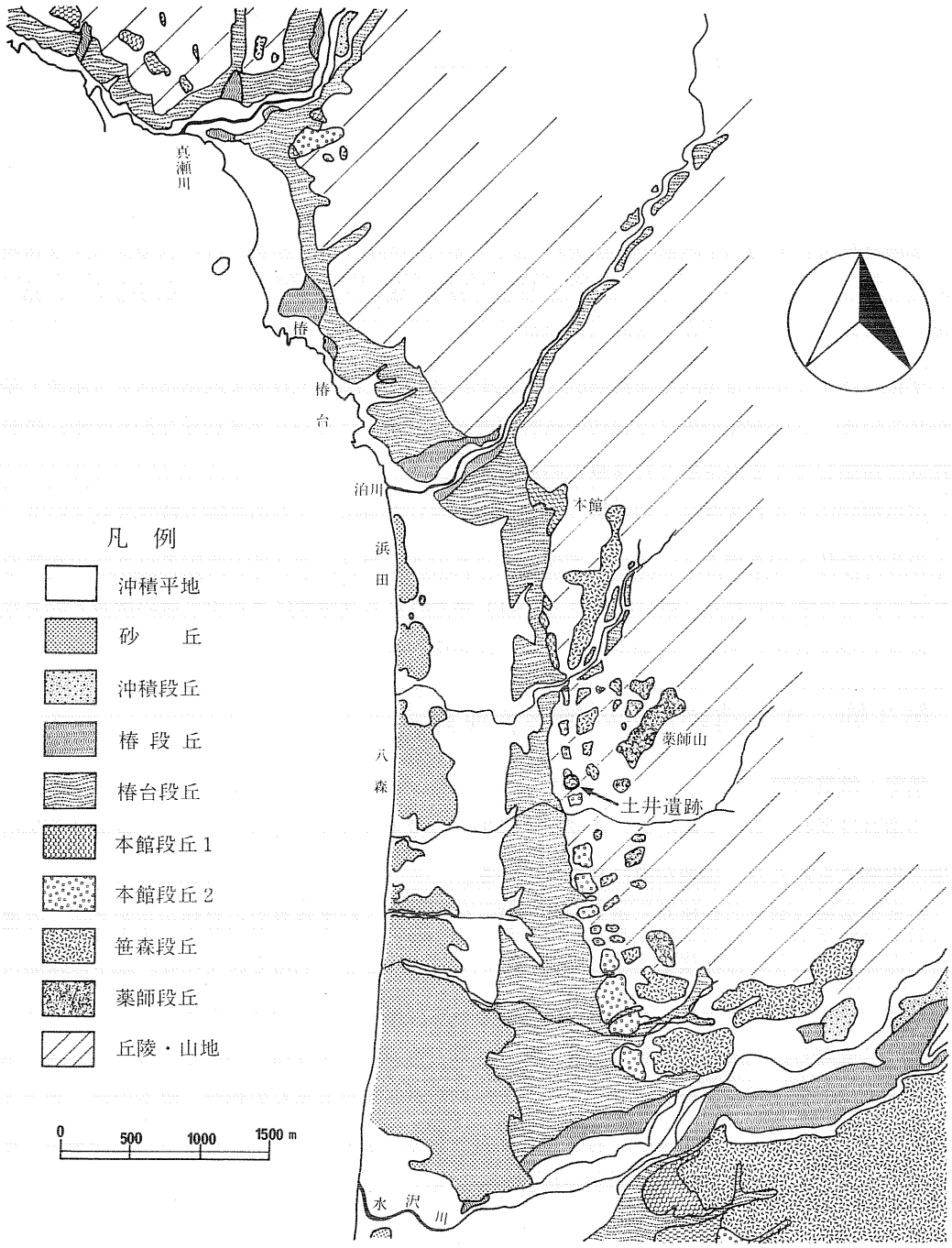
付近の地質は新第三紀層から成り，女川層・船川層および素波里安山岩類が分布する。当遺跡の西方にはわずかに沖積平地が形成されていて，水田として利用されている。地下には船川層群が厚くたい積しており，八森油田を形成していた。また，沖積面の海岸沿いには海岸砂丘が帯状に発達し，宅地や畑として利用されている。東方には薬師山（316 m）があり，山体は素波里安山岩と同質火山砕屑岩より成っている。肉眼では黒色緻密な岩相で，鏡下では，ガラス基流晶質の組織をもち，斜長石・普通輝石・磁鉄鉱などが斑晶として含まれる。当遺跡中に転石として認められるものはこの種の安山岩であろう。

また，付近一帯には南北方向に数段の段丘が分布する（第３図）。

段丘群

当地域には７段の段丘が分布しており，以下，古い順にその特徴をのべる。

①薬師段丘：当地域で最も古い段丘で，薬師山々麓にまつわるように分布し，北に高く（180 m）南に低い（100 m）。わずか１kmの距離で段丘面の高度差が80 mもある。傾斜角度にすると



第３図　土井遺跡付近の段丘分布図（工藤1980および白石ら1977の原図，一部加筆）

4.5度と大きい。段丘構成層は黄褐色の粘土に円磨された中礫が入り混じった層よりなる。当段丘は，この地点以北ではほとんど認められない。しかし，南方には能代平野を取り巻くように丘陵末端に点々と分布する。北能代第１段丘がそれである。

②笹森段丘：薬師山々麓から本館部落までの間によく発達した段丘で，段丘面の保存は前者より良好である。しかし，面は支沢で断ち切られるように浸食を受け，分布図上では点の連続として現われる。段丘面高度は北ほど高く60mから150 mまでと変化する。下位段丘面との比高も20～100 mと変化が大きい。構成層は薬師段丘のそれとほぼ同じであるが，地域によって著しい相違がある。すなわち，真瀬川以北では基盤岩上にほとんどたい積物をのせていないが，南方の水沢川流域では大礫ないし巨礫から成り立っている。また，分布形態も帯状から扇状地状へと変化する。

③本館段丘：後述する椿台段丘とともに山麓末端部に帯状に分布し，本館段丘2および1より成る。2つの段丘がそろって現われる地点は，真瀬川左岸部と水沢川左岸部だけで，他では本館段丘2または1のどちらかが分布する。段丘面高度は50～70mであり，下位の段丘面との比高は10m程度である。この段丘は水沢川左岸より南では急に分布域を広げ，やがて能代平野に広く分布する北能代第3段丘，第4段丘へと続く（第1表）。構成層は粗粒砂や中～大礫などから成り，砂の中に炭質物が含まれたりする。当遺跡はこの段丘面上にある。

④椿台段丘：当地域に最も広く分布し，かつ段丘面の保存も良好で見事な段丘景観を呈する。前述までの段丘群はいずれも海岸段丘的性格が強かったが，当段丘は海岸段丘としても，また，

第1表　段　丘　対　比　表

八森地区（工藤 1980）		北能代地区（白石ら 1977）	東北地方（中川 1961）	年代
沖積段丘			I	沖積世
椿段丘		北能代第7段丘	II	後期洪積世
椿台段丘		北能代第6段丘		
本館段丘	2	北能代第4段丘	III	
	1	北能代第3段丘		
笹森段丘		北能代第2段丘	IV	中期洪積世
薬師段丘		北能代第1段丘	V	

河岸段丘としてもよく発達している。真瀬川・泊川・水沢川といずれの河川でもその上流まで分布している。段丘面高度は30～60mと変化が大きく，ここでも北に高く南に傾いた傾向を示し，水沢川左岸においては沖積面下に埋没してしまう。

構成層は真瀬川を境に全くその様相を異にする。すなわち，真瀬川以北では基盤岩の上にわずかに粘土層がたい積しているだけであるが，真瀬川下流域およびそれ以南では亜円礫の大きさが巨礫～大礫の礫よりなり，その礫種はほとんどすべて後背地の地質を反映しているものばかりである。

⑤椿段丘：主に各河川の下流域で，椿台段丘に随伴しながら分布する特徴をもつ。段丘面高度は20～30ｍで，沖積面との比高は10～20ｍである。構成層は椿台段丘礫層とほとんど同じである。

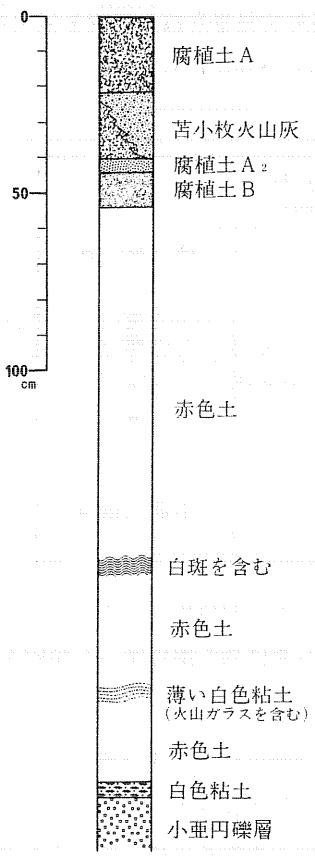
⑥沖積段丘：河岸段丘としてのみ分布し，真瀬川・水沢川の両岸にみられる。構成層は現河床礫と類似し，亜円礫の巨礫～大礫よりなる。

火山灰層について

当遺跡には火山灰層が発見され，町田洋・新井房夫両氏の鑑定の結果，この火山灰は北海道の石狩～苫小牧地帯に広く分布する苫小牧火山灰であることが明らかになった。この降下火山灰は朝鮮半島にある白頭火山から飛来したもので，年代は11世紀～13世紀の間であろうとされているものである。詳細を次にのべる。

①地質層序

前記の通り当遺跡は本館段丘１の段丘面にあり，地表面から２ｍ下位までの地質は次のようであった（第４図）。



第４図　土井遺跡地質柱状図

最上部には腐植土層であるＡ層（厚さ40cm），A_2層（厚さ４cm）があり，A_1層中に苫小牧火山灰がレンズ状にたい積していた。火山灰の一部は遺構の床面に接していたという（第13図第２号竪穴住居跡内降下火山灰堆積状況実測図を参照）。この赤色土中，白斑点が点在する部分があり，また白色粘土の薄い層が認められる部分もある。この粘土を後述の方法で分析した結果，火山ガラスが含まれていることがわかった。

赤色土の下位には４～５cmの厚さで浅黄橙色（7.5YR 8/4）粘土層があり，この粘土層からは火山ガラスを検出できなかった。

最下部には中礫の大きさで円～亜円礫からなる礫層がたい積している。

②腐植土層中の火山ガラスについて

第２号竪穴住居跡の中央床部にたい積していた浅黄色の火山灰を採取し，次のような方法で分析した。

試料採取

水　洗

○蒸発皿に試料約20ｇとり，水を入れて洗い，うわずみを捨てる。この作業をにごりがなくなるまで続ける。

乾　燥

○電気恒温器，95℃で12時間

篩分け

○0.25㎜以上の粒子は捨てる。
○0.25～0.125㎜の粒子は実体顕微鏡で観察する。
○0.125～0.063㎜の粒子は次の処理段階にまわす。
○0.063㎜より小さい粒子は捨てる。

塩酸処理

○0.125～0.063㎜の粒子をペトリ皿にとり，希塩酸に浸す。(12時間)

水　洗

○ペトリ皿に水を加え，残留した塩酸を捨てる。10回くりかえす。

乾　燥

○電気恒温器，95℃で５時間

封　入

○スライドグラスにカナダバルサムを洗し，電気焼入台，100℃で1分間熱する。次に試料少量ふりかけよくかきまぜる。カバーガラスをかける。

検　鏡

○偏光顕微鏡を用い，上方ニコルを45度で観察する。
○薄片中の全粒子を観察し，その中から火山ガラスの数を数える。
○全粒子数は線条法により，直交する二方向の線(接眼レンズの十字糸)上にかかる粒子数をそれぞれ数え，両者の積で表わした(100未満は四捨五入)。

○火山ガラスの形態は，繊維状，海綿状，扁平状のものについては特に注意した。

その結果，このたい積土にはおびただしい火山ガラスが含有されており（図版３－１），火山灰層であることが確認された。また，火山ガラスの形態別では繊維状のものが最も多く，扁平状のものが少なかった。

一方，この火山灰を町田洋・新井房夫両氏に送り鑑定を依頼したら次の通りであった。

試料１	火山ガラスの最大粒径　0.2mm
	火山ガラスの形態別による量の比較，パミス型＞バブルウォール型
	火山ガラスの屈折率　1.513～1.519
	アルカリ長石の屈折率　n_1＝1.523±
試料２	火山ガラスの最大粒径　0.3mm
	火山ガラスの形態別による量の比較，パミス型＞バブルウォール型
	火山ガラスの屈折率　1.513～1.520
	アルカリ長石の屈折率　1.523±

（いずれも新井房夫氏測定）

この結果から両氏とも「火山ガラスやアルカリ長石の特性から，この火山灰は苫小牧火山灰である。」と鑑定している。

次に第２号竪穴住居跡の西方にあるグリッド杭（12－Ｃ）に残った土柱から次のようにして試料を採取し，前述の方法で火山ガラスの有無を調べた。

○土柱の１側壁を切り取り，縦10cm，横10cmの柱を作り，上から順に３cmの厚さで試料採取した。採取にあたっては混入物がはいらないよう十分注意した。

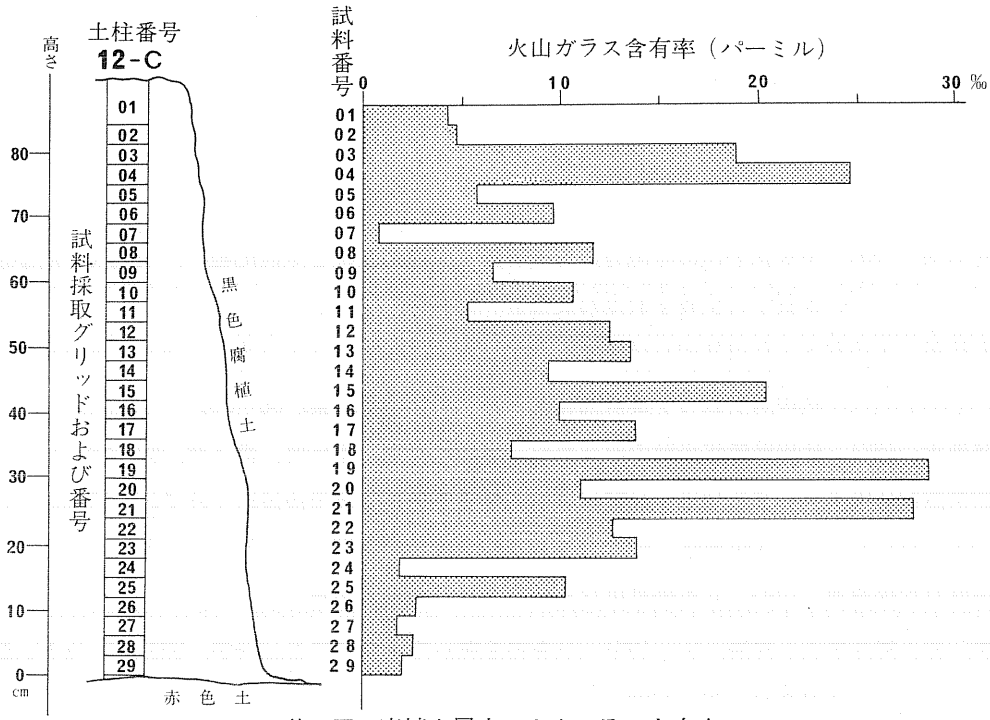
○全粒子に対する火山ガラスの含有比は千分率（‰）で表わした。

その結果明らかになったことは次の通りである（第５図）。

①全試料に火山ガラスが含有していた。

②火山ガラスの含有率のピークは２ヵ所にあり，大きいピークは赤色土面より上30cm前後の位置にあり，この火山ガラスの形態は苫小牧火山ガラスと鑑定された試料１・２とよく似ていた。他のピークは赤色土面より80cm上の位置にあり，これは地表面に近いところである。やはり試料１・２とよく似ていた（図版３－２）。

③赤色土面より上10cmまでの間は火山ガラスが激減し，試料１・２によく見られた繊維状の火山ガラスはほとんど見られなかった。



第５図　腐植土層中の火山ガラス含有率

④試料のいくつかには褐色をした火山ガラスがわずかに見られた。これは，試料１・２には全く認められなかったものである。

一方，この火山灰層は「土層転写」によりたい積状態がそのまま保存されており，それを実体顕微鏡で観察した。それによると，火山灰層上部に水の作用で形成されたと思われる流理構造が認められた（図版３－３）。

考察

当遺跡Ａ調査区では６棟の竪穴住居跡が発掘されたが，なぜ第２号竪穴住居跡にだけ火山灰がたい積したか。また，腐植土層中に火山灰が含まれているのか，などは興味のある問題だった。以下に考察する。

当遺跡は斜面上にあり，第２号竪穴住居跡は斜面に対する造りからみて一時的に水をためることができたと思われる（第13図参照）。また，斜面に降った雨水はこの遺構にも流入するはずである。このような状態であった時，降下火山灰があったとすれば第２号竪穴住居跡にだけはそのままたい積できるが，他の場所に降った火山灰は降雨時に流失してしまう。この時，第２号竪穴住居跡の上手にある斜面上に降り積もった火山灰はこの遺構に流入したい積するはずである。第２号竪穴住居跡にたい積した火山灰層の上部に流理構造が認められることや，腐植土層中に火山ガラス含有率のピークが２ヵ所あることなどもこの考えを支持するものと思われ

る。

文献

浅野五郎　1948　1942—1943年の白頭山探険により発見された諸事実(一)，(二)，(三)，(四)(五)，(六)　鉱物と地質　第１巻１号，２号，３号，４号，５号，６号，27—31，71—75，128—130，181—184，228—231，267—270。

中川久夫　1961　本邦太平洋沿岸地方における海水準静的変化と第四紀編年，東北大学理学部地質学古生物学教室邦文報告　第54号　１—61。

白石建雄・工藤英美・秋田第四紀研究グループ　1977　秋田県北部日本海沿岸地帯の段丘群，秋田大学教育学部研究紀要　自然科学　第27集，86—96。

内藤博夫　1977　秋田県能代平野の段丘地形，第四紀研究，第16巻，第２号，57—70。

秋田第四紀研究グループ米代班　1977　秋田県能代平野から藤里地域にかけての段丘群について，秋田地学　No.27，１—９。

秋田県自然保護課　1980　八森岩館県立自然公園学術調査報告書　１—20。

町田　洋・新井房夫・森脇　広　1981　日本海を渡ってきたテフラ　科学　VOL51，No.9，岩波書店，562—568。

庄子貞雄・山田一郎　1983　平鹿遺跡発掘調査報告書　秋田県教育委員会，243—246。

桜田　隆　1983　土井遺跡から粉状火山灰を検出　考古学ジャーナル　No.226，30。

第３章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

１．調査区の設定

範囲確認調査の結果から段々畑地区と山林地区に分け，Ａ調査区，Ｂ調査区とした（第６図）。

第６図　調査区及び周辺地形図（数字の単位はｍ）

Ａ調査区は，山本農林事務所が打設した道路中心杭のうちⅠ.P.９とNo.45の２本を選択し，この中心杭を結ぶ直線を設定基準線（Ｘ軸）とした。Ⅰ.P.９を基準点として直交線（Ｙ軸）を設定し，５ｍ毎に杭を打設した。Ａ調査区では杭を調査予定区域だけでなく，範囲確認調査時のトレンチもカバーできるようにした。グリッド杭打設後，グリッド呼称を（ｘ－ｙ）の方法で表示する関係から（０，０）の基準交点，Ｘ軸基準線，Ｙ軸基準線をⅠ.P.９から任意点に移転した。Ｘ軸にアラビア数字，Ｙ軸にアルファベットを付し，両者の組み合わせでグリッド名としているが，各グリッドは南側隅の杭の（ｘ－ｙ）で表示している。仮基準点のⅠ.P.９は20－Ｂと表示される。グリッドＸ軸はＮ－43°－Ｅを計測する。

Ｂ調査区は，ＭＣ10とＢＭ３を結ぶ直線を設定基準線（Ｙ軸）とした。ＭＣ10を基準点として直交線（Ｘ軸）を設定し，調査予定区域に５ｍ毎に杭を打設した。Ｂ調査予定区域の最西端を50－Ａと表示し，ＭＣ－10は54－Ａとした。グリッドＸ軸はＮ－21°－Ｅを計測する。

２．発掘調査方法

範囲確認調査の結果から調査を実施するにあたり，次の諸点についてそれぞれ資料が得られるよう努めることとした。

①Ａ調査区内№３トレンチの地山面上において旧石器（グレイバー）が出土していることから，剝片，岩片についても収納，洗浄して確認する。

②竪穴住居跡が確認された場合，遺物の出土状況をよく観察し，それが竪穴住居構築時の遺物（構築材に転用）か，住居の廃棄とともに廃棄された遺物が住居廃棄後に投棄された遺物かを判断し，「共伴関係」を把握するよう努める。

③Ｂ調査区では「館跡」の可能性もあるので遺構の検出状況・新旧関係等を把握するよう努める。

遺構の実測は遣り方測量による。実測の縮尺は，竪穴住居跡，土壙，Ｔ―pit，柱穴はそれらの土層断面実測も含め１／20とし，かまどは１／10とした。遺物の取り上げ方法はその出土位置等を平面図にレベル，層位，種類を記録して収納した。

第２節　調査経過（図版２）

本遺跡の調査は昭和58年８月８日に発掘器材を搬入し，Ａ調査区の全域と通路部分の草刈りを実施した。プレハブ建設地と調査区では高低差が大きいためＡ調査区東側にテントを設営し器材置場とした。Ａ調査区は３段の畑となっており，中央段には桐が植栽されていた。各段の畑の耕作土は比較的薄いが，縁辺部だけ非常に厚くなっている。この段が自然に出来たものか，人為的なものかは不明である。８月９日Ａ調査区にグリッド杭を打設し粗掘を開始する。14―Ｇグリッドで大型広口壺形須恵器の口縁部から胴部にかけての大破片が出土（精査の結果第５号竪穴住居跡かまど煙道部天井の被覆材転用土器片と判明）。能代山本地方史研究会来跡。８月13日早朝にプレハブの近くの畑に熊が出没したとの情報があり，見学者も多いので『熊に注意』の立看板を設置する。８月18日14―Ａ・Ｂ・Ｃグリッドで土師器片が多量に炭化物・焼土の中に埋没する状況で確認された（後日のプラン確認の結果，第３号土壙と第６号竪穴住居跡のかまど部分と判明）。八森町教育長・次長・社教係長来跡。８月19日Ａ調査区の遺構プランがほぼ把握でき，竪穴住居跡６棟（ＳＩ001～ＳＩ006），土壙３基（ＳＫ002～ＳＫ004），焼土遺構１基（ＳＮ001），Ｔ―pit２基（ＳＫ(T)001～ＳＫ(T)002），柱穴様ピット多数が検出された。

このうち竪穴住居跡２棟（ＳＩ001，ＳＩ004）は路線外に拡がっており全掘は出来ない。ＳＩ002，ＳＩ003，ＳＩ005の３棟にはかまど煙道部以外にも張り出し部が見られることから出入口ではないかと思われた。Ｂ調査区の草刈り中に蜂（スズメバチとクロスズメバチ）の巣があり危険であるため，作業を中断した。見学者のため『熊・マムシ・スズメバチ注意』の立看板を通路入口２ヵ所に設置し，注意を喚起する。町役場開発課長・開発係長が来跡。８月24日埋蔵

文化財センター岩見副所長・柴田文化財主事来跡。八森地方の地質に詳しい観海小学校工藤英美教諭を同行訪問。８月25日Ｂ調査区のスズメバチの巣を撤去してもらうため，町教育長・社教係長・町役場広報係が，養蜂の経験のある教育次長・元公民館長の吉田氏を同行して来跡。作業にはいったところ，早朝に熊が巣を襲撃し，破片が残るのみであった。草刈りとグリッド杭打設を行う。８月26日第２号竪穴住居跡にレンズ状に火山灰が厚く堆積しているのが検出されたが，県内で確認されている火山灰とは色調・粒径が異なることと，粒径が均一であるところから，遠くから運ばれてきたのではないかと考えられた。この前後にＮＨＫで火山灰についての特集があり，日本の火山灰は偏西風に影響されて噴出源の東側に堆積するという知識を得たので日本海をわたってきた火山灰ではないかと考えた。土層堆積状況を平面・断面実測後，火山灰サンプル採取と保存のための土層転写を行うことにし，埋蔵文化財センター橋本文化財主事にその方法を教示される。８月30日土層転写を実施する。ＳＩ002，ＳＩ003，ＳＩ005のかまど近くの張り出し部は階段のある出入口であることが判明した。Ｂ調査区は松，柿，桜の立木がそのまま残されており，伐採・抜根に時間がかかることから，立木をそのままにして調査を進めた。斜面の下方側壁のない竪穴状遺構が３棟重複している状況で検出された。またその床と思われる平坦面からは自然石と焼土の堆積が確認された。竪穴状遺構の南側には溝状遺構が存在する。北羽新報，読売新聞の各記者が取材に数回来跡し報道しているが詳細については９月10日午後２時から開催予定の現地説明会で発表することにする。岩館小学校教諭数名が来跡。９月３日八森小学校５年生・６年生が見学のため来跡。９月８日八森中学校２年生が遠足の途中見学のため来跡する。９月９日発掘器材・テントをプレハブへ撤収後，現場作業員のために説明会を行う。９月10日発掘器材を搬出したあと午後２時から参集した報道関係者・地元民50余名に埋蔵文化財センター佐藤良太郎所長のあいさつのあと現地説明会を行う。

第４章　検出された遺構と遺物

第１節　遺跡の土層

本遺跡のＡ調査区は畑として耕作されていたのであるが，その暗褐色を呈する耕作土の下に同じ暗褐色土を１層はさみ，地山面となっているところが多い。わずかに段々畑の縁辺部でいくつかに分層できるだけである。

堆積土が厚い第４号竪穴住居跡付近の堆積状況を観察すると，耕作土も含め地山面直上まで５層に分層することが可能である。現地表面から１層：13～20cmの層厚をもつ耕作土で暗褐色を呈する。２層：８～20cmの層厚をもち暗褐色を呈する。１層と２層は本来同層かとも考えられたが，第４号竪穴住居跡のたちあがりは２層上面まで確認できることと，住居跡内の埋土が

住居跡外の２層の上面に位置していることから２層上面が掘り込み面と判断した。３層：７～10cmの層厚をもち黒褐色を呈する。４層：６～10cmの層厚をもち褐色を呈する。縁辺部に部分的に確認される。５層：６～15cmの層厚をもち黄褐色を呈する地山層への漸移層と考えられる。

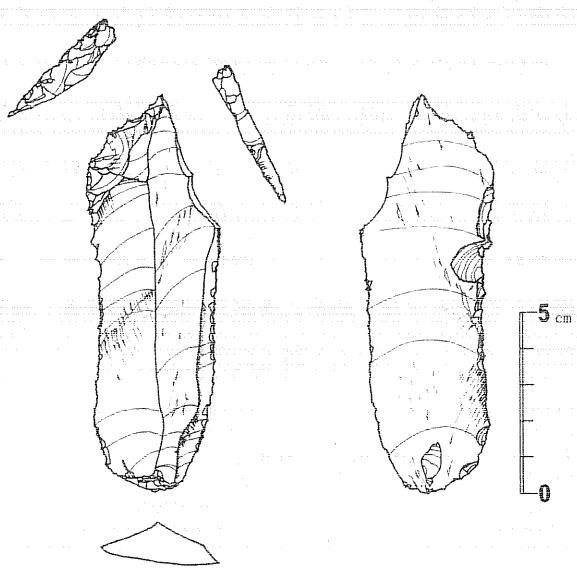
Ｂ調査区は尾根南側斜面であるため腐植土が厚く堆積しており，地山面に近くなるにつれ硬度を増し，黒土化している。

第２節　検出遺構と遺物

本遺跡では，範囲確認調査時出土遺物も含め，旧石器時代の遺物として彫刻刀形石器が１点，縄文時代の遺構として所謂Ｔ―pitが２基，遺物として土器片１点，石鏃１点，石匙１点の他剥片・岩片が20点出土した。また歴史時代の遺構として竪穴住居跡・竪穴遺構９棟，土壙３基，焼土遺構１基，溝状遺構１条の14遺構が検出され，土師器・須恵器・陶磁器・刀子・鉄滓・羽口・土製支脚等が多数出土した。以下これらの遺構・遺物について説明する。

１．旧石器時代の遺物（第８図）

範囲確認調査時のNo.3トレンチ（本調査グリッドではＡ調査区13―Ｄグリッド）で地山面直上から出土した最大長11.0cm，最大幅3.45cm，最大厚1.1cmを計測する頁岩製の彫刻刀形石器（グレイバー）である。



第８図　旧石器実測図

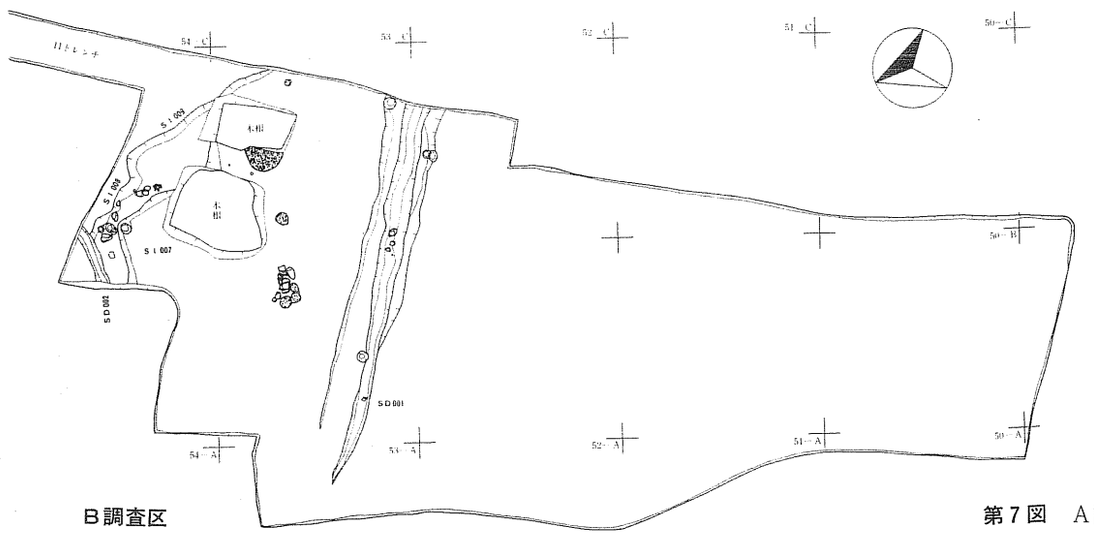
２．縄文時代の遺構と遺物

(1)　遺構（第９図）

ＳＫ(T)001（図版４）

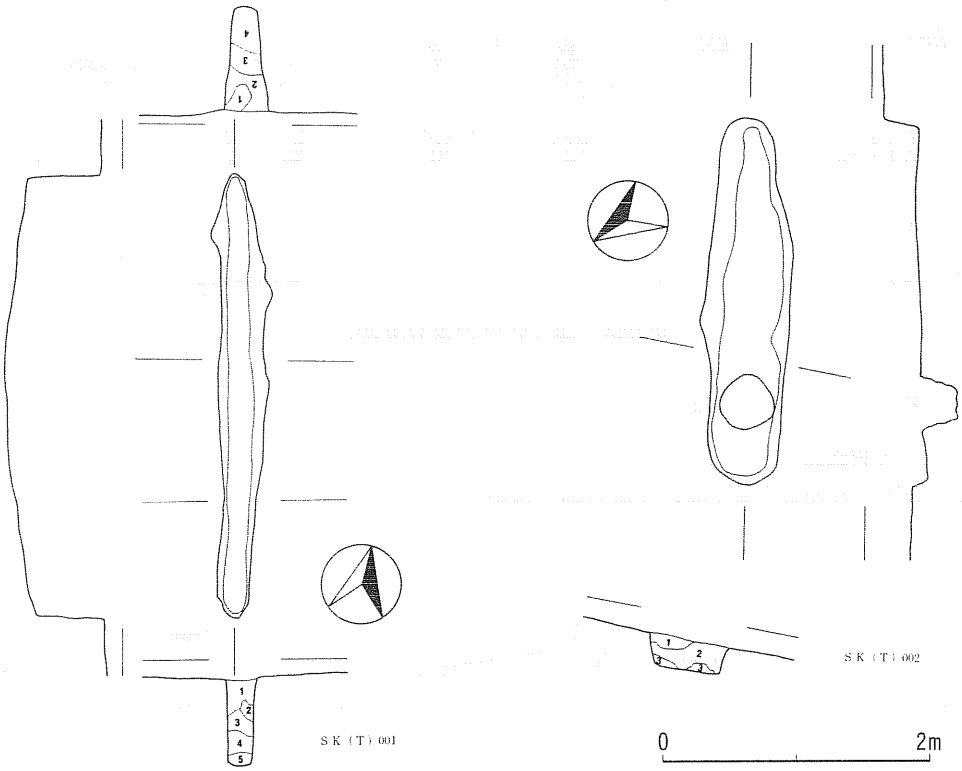
長軸方向Ｎ―22°―Ｗで20―Ｄ・Ｅ，21―Ｄグリッドにまたがり検出され，長さ333cm，上幅24～35cm，深さ51.1～77.9cm，下底幅15～20cmを計測する所謂Ｔ―pitと呼ばれる遺構である。

埋土は５層に分層できた。　１：炭化物多量混入黒褐色土　２：褐色土　３：炭化物微量・



第7図　A調査区・B調査区遺構配置図

褐色土少量混入暗褐色土　４：炭化物・褐色土微量混入暗褐色土　５：炭化物微量混入黒褐色土　２層を除き炭化物を混入している。遺物は出土しなかった。



第９図　SK(T)001・SK(T)002土壙実測図

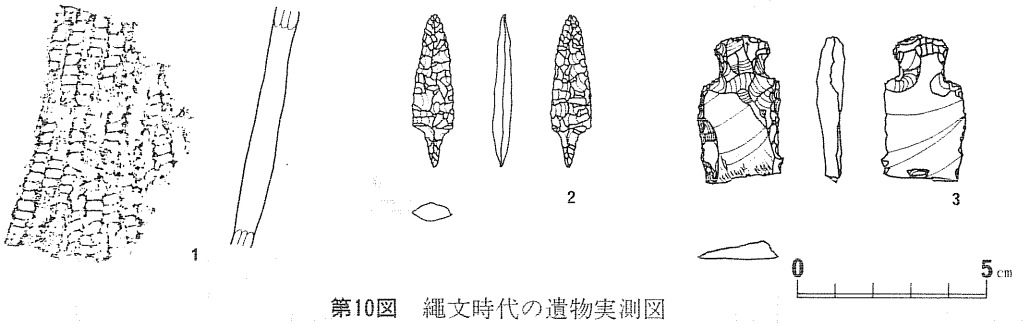
ＳＫ(T)002

16—Ｃグリッドで検出され，長さ276cm，上幅30～68cm，深さ13～25cm，下底幅10～46cmを計測し，長軸方位Ｎ—56°—ＷのＴ—pitである。北西側下底に撹乱穴がある。非常に浅いことからＴ—pitとすることに疑問もあるが，現在段々畑となっている地形を原地形が南東下りの台地状地形であったと想定してＴ—pitと呼称した。埋土は３層に分層されたが，いずれも粘性が強い。　１：黒褐色土でポロポロとブロック状に削れる。　２：褐色土混入暗褐色土　３：褐色土　遺物は出土しなかった。

(2)　遺物（第７図）

縄文時代の遺物は範囲確認調査と本調査をあわせても３点出土したにすぎない。１は17—Ｅグリッドの地山面上から出土した土器片である。胎土・焼成とも良好で堅緻なつくりとなっている。２は15—Ｃグリッド付近で表面採集された石鏃である。長さ4.0cm，最大幅1.15cm，最大厚0.5cm，重量1.75ｇを計測する細身の頁岩製有茎石鏃である。３は範囲確認調査のNo.２トレンチ（本調査グリッドでは10—０グリッド）で地表下45cmの腐植土の黒土化層中から出土し

た，先端部を欠失する頁岩製縦型石匙である。現存部は長さ3.75cm，幅2.1cm，厚さ0.75cmを計測する。

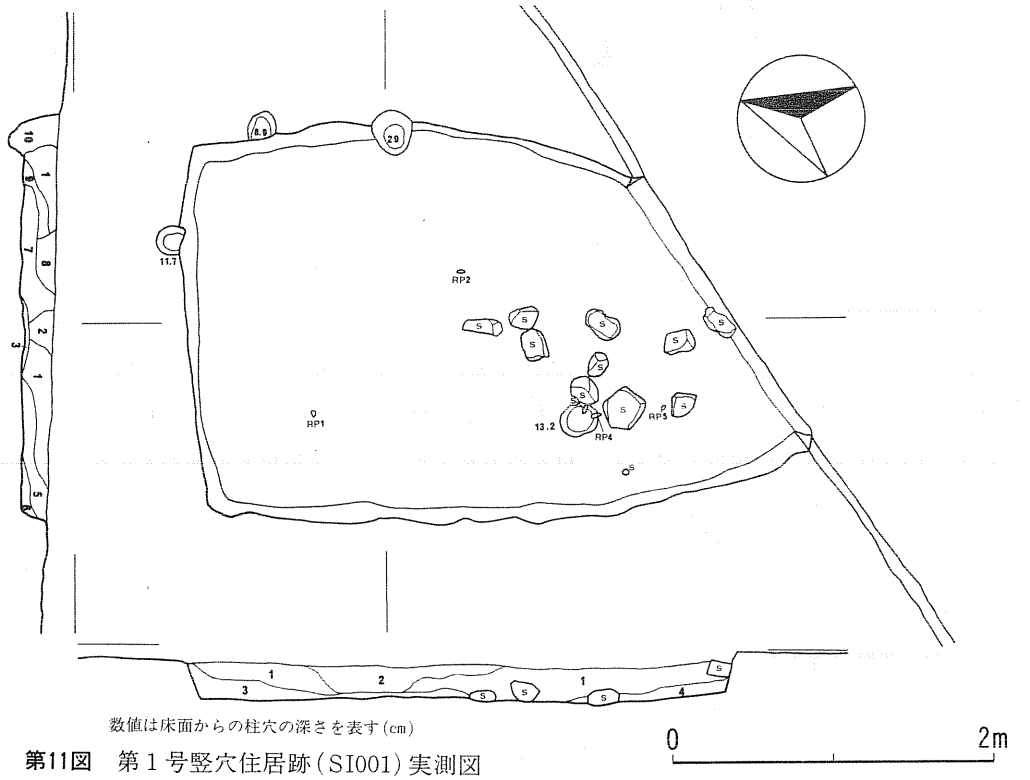


第10図　縄文時代の遺物実測図

３．歴史時代の遺構と遺物

(1)　Ａ調査区

第１号竪穴住居跡（ＳＩ001）（第11図，図版４）



数値は床面からの柱穴の深さを表す(cm)

第11図　第１号竪穴住居跡（SI001）実測図

19―Ｄ・Ｅ，20―Ｄ・Ｅグリッドにまたがり，範囲確認調査時に耕作土を除去するとすぐ検出されたが，南側壁は路線外にあり，確認できなかった。

長軸方位Ｎ―17°―Ｅ，北側壁長236cm，西側検出部壁長378cm，東側検出部壁長283cm，検出

できた部分の上端での面積7.79m²で，長辺である東・西側壁に胴張りのみられる長方形プランを呈すると推定される。

深さは北側壁が18.6～29cm，西側壁が9.3～18.6cm，東側壁が20.6～32cmで壁面は各壁とも18～24°の範囲で外傾している。

埋土は10層に分層できたが，全体的に粘性があり，４を除き炭化物が混入している。　１：ロームブロック（φ70mm）・ローム粒（φ３～５mm）を多く含み，炭化物が微量散在する黒褐色土　２：ローム粒（φ２～３mm）と炭化物が微量散在する極暗褐色土　３：明褐色土粒（φ２～５mm）を多量に混入する暗褐色土　４：暗褐色土　５：褐色土粒（φ３～５mm）と炭化物が微量散在する黒褐色土　６：明褐色土粒（φ２～６mm）が密に混入する黒褐色土　７：褐色土粒（φ２～３mm）が密に，炭化物が微量散在する暗褐色土　８：炭化物が多量に混入する暗褐色土　９：褐色土塊（φ10mm）が多量に，炭化物が微量散在する暗褐色土　10：炭化物が多量に，褐色土粒（φ１～２mm）が少量混入する黒褐色土　床面は地山面をそのまま利用し，よく踏み固められ平坦である。柱穴は床面中央からやや南西側に１ヵ所穿たれている。床面上と埋土中に11個の自然石が検出されたが，大部分は床面上のものである。土器は５点出土したが，いづれも甕形土師器胴部の小破片で埋土中からのものである。

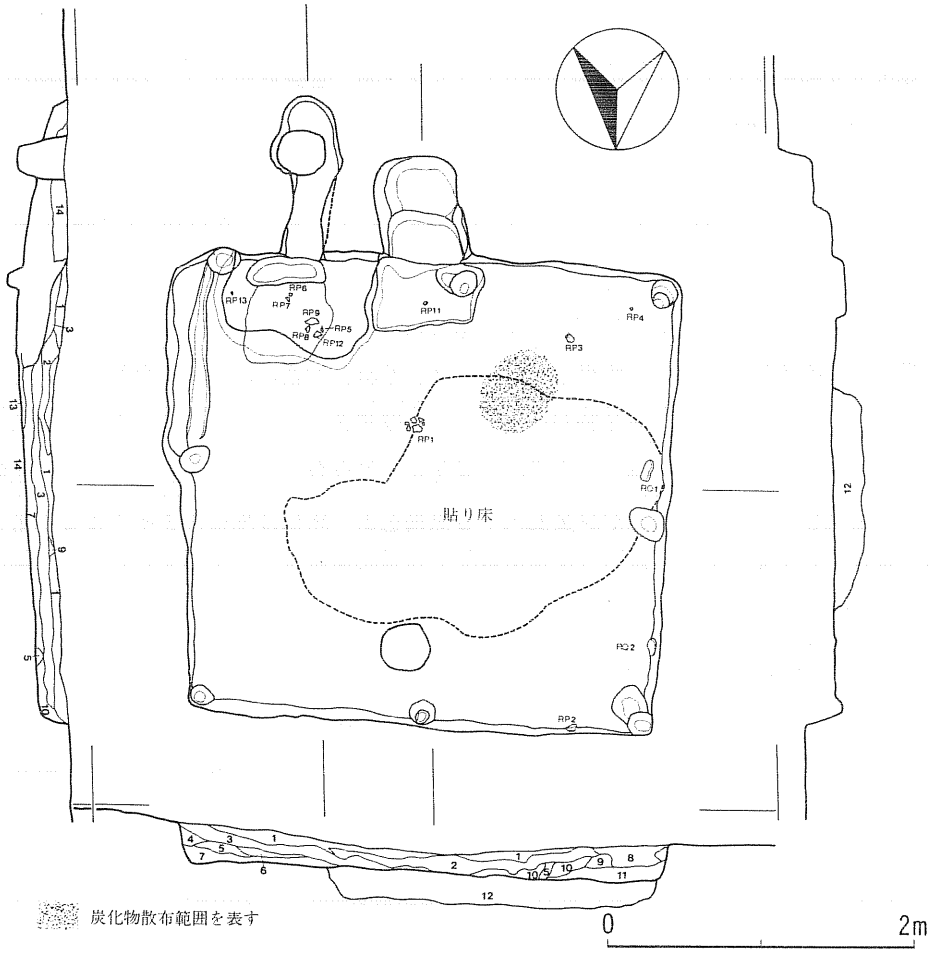
第２号竪穴住居跡（ＳＩ002）（第12図～第16図，図版５）

16―Ｂ・Ｃ，17―Ｃグリッドにまたがり，方形プランを呈し，南西隅部近くの南側壁に，所謂，トンネル式煙道部をもつかまどが付設され，南側壁中央部に出入口と思われる張り出し部がプラン確認時に検出された住居跡である。

主軸方位がＳ―1°―Ｅで，南側壁長305cm，東側壁長302cm，北側壁長305cm，西側壁長303cmのほぼ方形に近いが，南東隅近くの東側壁120cmが外側に27cm張り出している。

プラン確認面での面積は10.55 m²をはかる。プラン確認面から床面までの深さは，南側壁で24～28cm，東側壁で27.5～37.2cm，北側壁で19.0～25.9cm，西側壁で21.1～23.2cmで，各壁面は12～19°の範囲で外傾している。埋土は13層に分層できた。　１：炭化物とシルト質火山灰小塊を混入するシルト質暗褐色土　２：浅黄色を呈するシルト質火山灰　３：炭化物とローム小塊を混入するシルト質黒褐色土　４：３より炭化物が少ない暗褐色土　５：地山のローム塊　６：粘質暗灰黄色土　７：強粘質黒色土　８：黒褐色土　９：木根による撹乱　10：粘質のにぶい黄褐色土　11：ローム粒混入暗褐色土　12：床面を掘り込み，再び埋め戻した地山ローム　13：かまどから流出・堆積した焼土　２層の浅黄色火山灰は中央からやや西側3.14m²の範囲に最大12.0cmの厚さで凸レンズ状に堆積していた。

床面は地山面を踏み固めたものであるが，中央部分2.85m²は，15～20cm掘り込み，その土を再び埋め戻し（貼床）たもので，他の部分に比べて軟弱である。柱穴は各隅部と各壁面中央部

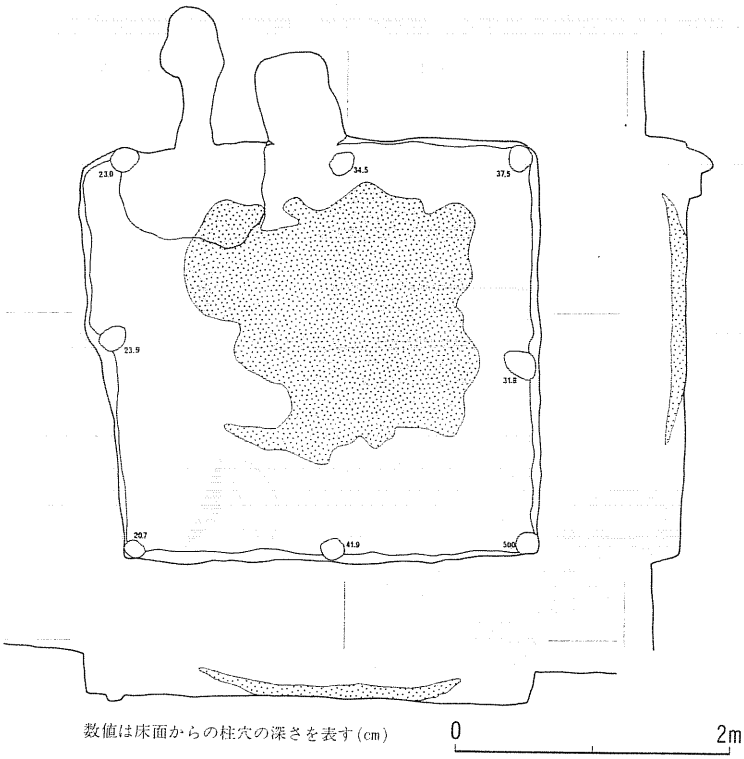


第12図　第２号竪穴住居跡（SI002）実測図

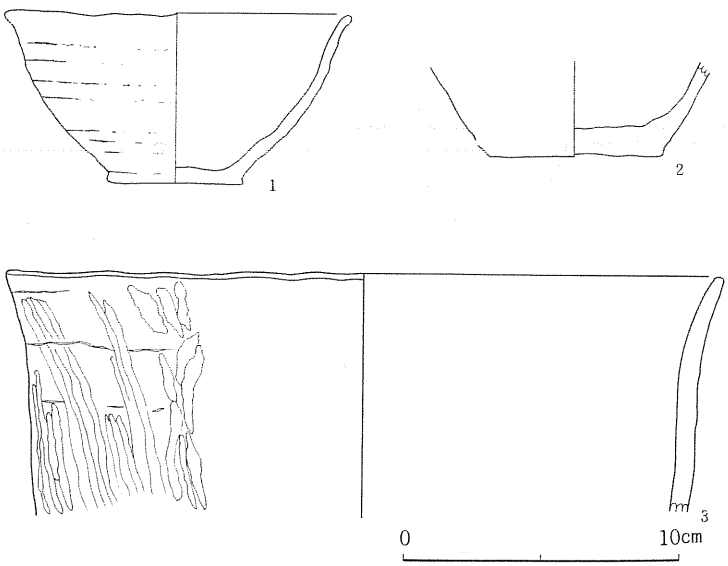
床面に合計８本が穿たれている。柱穴底の平均直径は7.81cm，深さは平均32.9cmで細く深い柱穴である。東側壁中央の柱穴と南東隅部の柱穴を繋ぐように幅７～12cm，深さ6.6～8.9cmの溝が存在する。この柱穴間はまだ壁面が外側に張り出している部分である。南側壁のほぼ中央部に幅56cm，長さ（奥行）68cmの張り出し部が付設されている。この張り出しは壁面との直交線に対し13°東側に偏している。張り出し部には竪穴本体側から幅45cm，奥行27cmの不整長方形を呈する面と，19.2cmの比高をもつ幅35cm，奥行28cmの不整長方形を呈する面があり，更に23.1cmの比高でプラン確認面に至る。この張り出し部の付設されている部分の床面は幅65cm，奥行48cmの略長方形に深さ８～11.4cm掘り凹められている。

この張り出し部と南東隅部との間にかまどが付設されている。かまどは煙道部が幅28cm，高さ15cmでトンネル状に掘り込まれたもので，煙出孔に向かって底が10.5°の角度で上昇する。住

居壁面の床面に壁に沿って長さ53cm，幅16cm，深さ７cmの楕円形の掘り込みがある。かまどには粘土等の土以外に構築材を使用していない。



第13図　第２号竪穴住居跡内降下火山灰堆積状況実測図



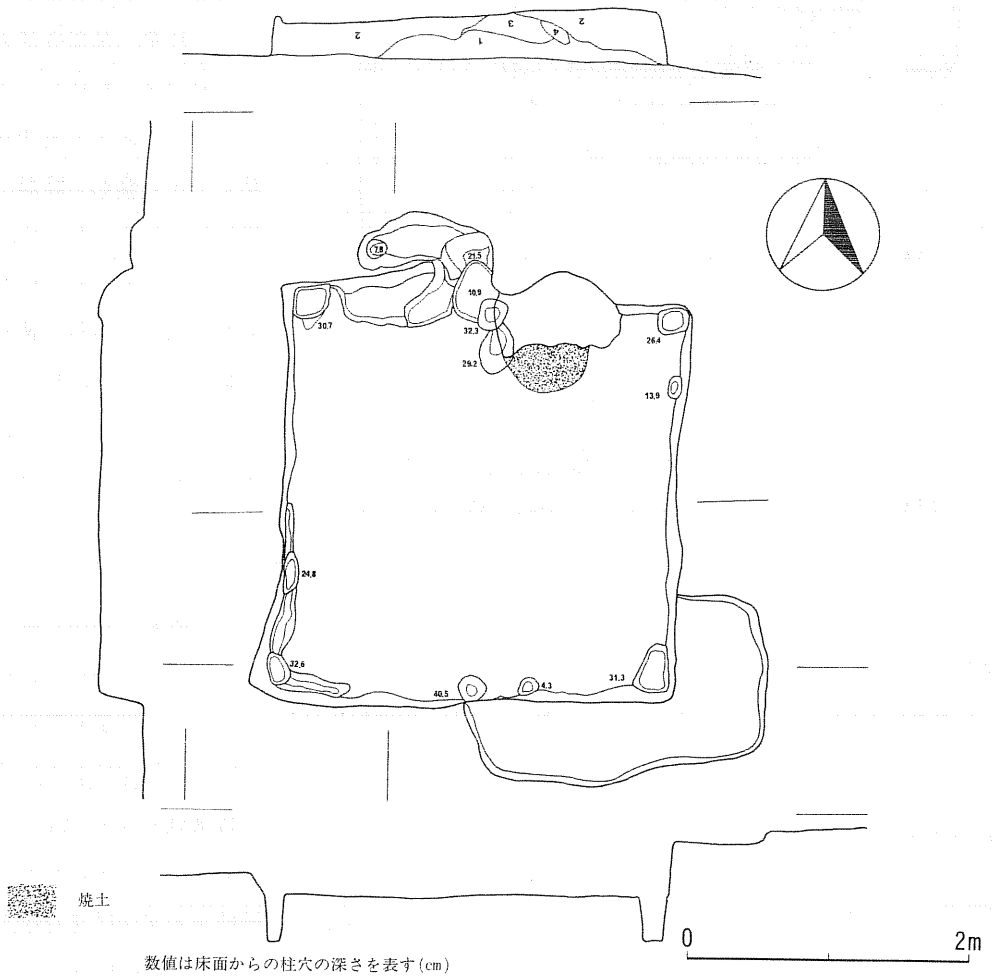
第14図　第２号竪穴住居跡出土遺物実測図

遺物は極めて少ない。火山灰層上３～５cmから復原可能な坏形土師器１個体（１－ＲＰ１），床面上から甕形土師器底部破片（２－ＲＰ２およびＲＰ４），坏形土師器底部破片（ＲＰ３），自然石（ＲＱ１・２），かまど天井部粘土上から甕形土師器小破片（ＲＰ５～９，12，13），出入口部下方の長方形掘り込み下底から甕形土師器片（ＲＰ11）が出土した。また，かまど燃焼部底面から甕形土師器片(3)が出土した。

１は，回転糸切り技法により轆轤から切り離され，その後の調整は行われていない。第６号竪穴住居跡内出土坏形土師器口縁部破片（ＳＩ006，ＲＰ63）１点と接合する。砂礫をわずかに含む胎土でつくられ，焼成は良好である。推定口径12.4cm，器高6.2cm，推定底径4.8cmを計測し，両面とも浅黄橙色を呈するが，内面

の口唇下１cmのあたりで幅約１cmで帯状に煤状炭化物が付着している。２は，回転糸切り技法により轆轤から切り離された甕形土師器底部破片である。胎土に砂礫を多く含み，焼成良好で堅緻なつくりとなっている。両面とも淡黄色を呈する。底径6.3cm，現高3.6cmを計測する。３は，粘土紐巻上げ痕が外面に残存する甕形土師器口縁部破片である。成形後，外面は箆みがきされているが粗雑である。胎土に砂粒を含み，焼成は良好で堅緻であり，色調はにぶい橙色を呈する。推定口径26.2cm，現高8.7cmを計測する。

第３号竪穴住居跡（ＳＩ003）（第15図～第17図，図版６）

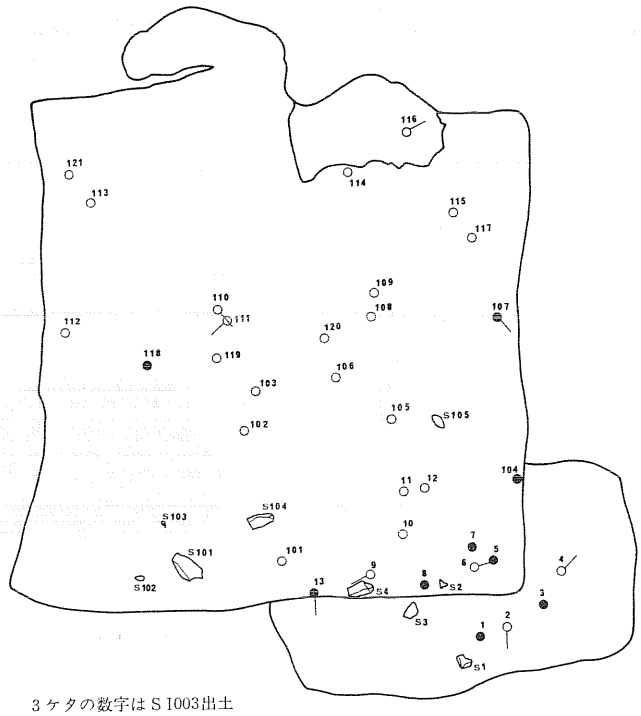


第15図　第３号竪穴住居跡（SI003）・第２号土壙（ＳＫ002）実測図

13―Ｃ，14―Ｃグリッドにまたがり南東壁隅部が第２号土壙（ＳＫ002）と重複して検出された。プラン確認の段階では埋土に地山ロームのブロックが大量に混入しているため，その重複の新旧関係がつかめなかったが，土層断面観察で第２号土壙が第３号竪穴住居跡の埋没後に

掘り込まれていることが判明した。（この土層断面は図化途中で急な豪雨のため，斜面上方から流れ込んだ水の圧力によりベルトが崩壊し，図化記録としては残っていない。）

主軸方位Ｎ－30°－Ｅ，北側壁長290cm，西側壁長287cm，南側壁長300cm，東側壁長284cmでほぼ方形に近いが，西側壁が弧状に内側に入り込んでいる。プラン確認面での面積は8.88m²をはかる。プラン確認面から床面までの深さは北側壁で15.6～23.5cm，西側壁で15.6～20.0cm，南側壁で15.6～31.7cm，東側壁で15.6～31.1cmで各壁面は５～16°の範囲で外傾している。埋土は４層に分層された。　１：地山ロームブロック大量混入黒褐色土　２：地山ロームブロック大量混入暗褐色土　３：炭化物微量混入黒褐色土　４：炭化物微量混入暗褐色土。ロームブロック混入層と炭化物混入層に大別できるが，１と２では２の方がブロックが量的にも多くボロボロした感じであり，１は粘性がありボソボソしている。埋土堆積状況の観察からは，埋没までの過程で２層流入後に時間的経過を認めるか否かの問題はあるが人為的に埋められたと看取される。床面は小さな凹凸がいたるところにあるが，巨視的には平坦でよく踏み固められている。特にかまどの前面がかたい。柱穴は，各壁隅部と北側壁中央部および南側壁中央部の床面にあり，これらが主柱穴と考えられる。南西隅部柱穴に連結するように，西側壁中央部やや南側から隅部までの壁面に沿って床面に長さ108cm，上幅５～15cm，深さ4.3～13.2cm，底幅２～５cmの溝と，南側壁下床面に長さ43cm，上幅８～12cm，深さ3.9～10.2cm，底幅３～5cmの壁溝がＬ字状に存在する。北側壁中央部からやや東側にかまどが付設されている。かまどは煙道部が短く，急上昇して煙出孔に向かう所謂関東型を呈するものである。両袖部には扁平な自然石を直立させて芯材とし，粘土・黒色土・ロームで被覆している。右袖部の扁平石は３個の小さな自然石で手前を押えられている。左袖部は柱穴とそれに連結するくぼみにも半分被覆する状況であり，床面の焼土範

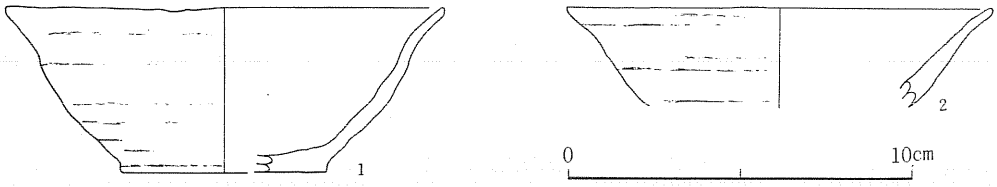


３ケタの数字はＳＩ003出土

第16図　第３号竪穴住居跡・第２号土壙遺物出土分布図

囲の位置関係からも柱を建てたあとで，かまどを構築したと推測される。

かまどと北西側隅部との間に幅95cm，奥行50cmの張り出し部が付設され，その前面の床面には奥行32cm，幅76cmで掘り込みが認められる。断面図で見られるように張り出し部と床面の間には段差がつけられている。



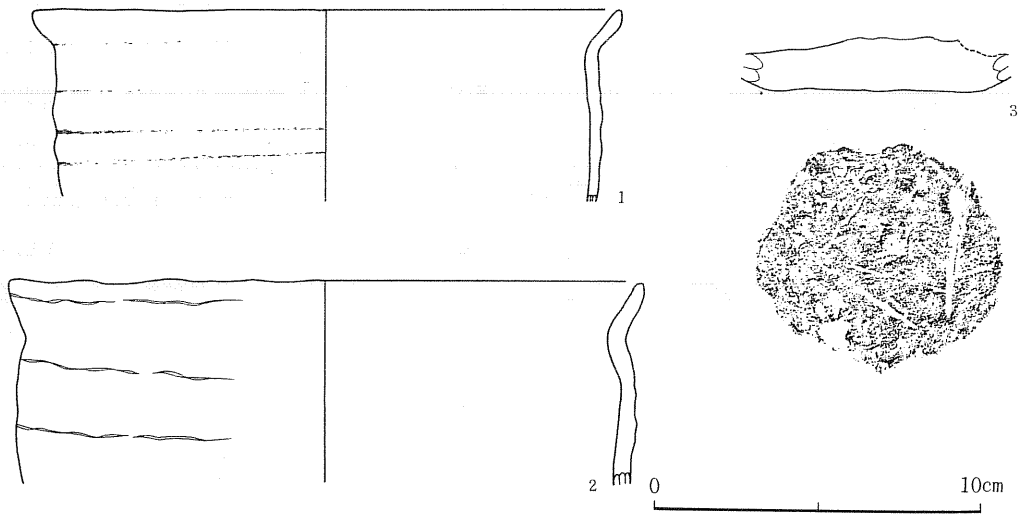
第17図　第３号竪穴住居跡出土遺物実測図

遺物は土器と自然石であるが埋土中からの出土がほとんどで，住居廃棄後に外部から投・廃棄されたものと解釈される。外面を粗く箆削りした甕形土師器胴部破片が多く，図化できたのは坏形土師器２点（１―ＲＰ112，２―ＲＰ104）のみである。１，２とも轆轤を使用して整形され，胎土に細砂粒をわずかに含む。焼成は良好で，浅黄橙色を呈する。１は推定口径12.8cm，器高4.9cm，推定底径5.9cm，２は推定口径12.4cm，現高2.9cmを計測する。

第２号土壙（ＳＫ002）（第15図・16図・18図，図版６）

13―Ｃ，14―Ｃグリッドにまたがり，第３号竪穴住居跡と重複して確認されたが，本土壙が新しい。長軸方位Ｅ―6°―Ｎ，長辺217cm，短辺128cm，深さ1.8～6.3cmの四辺とも胴張りのある長方形プランを呈する土壙である。下底は小さな凹凸がある。

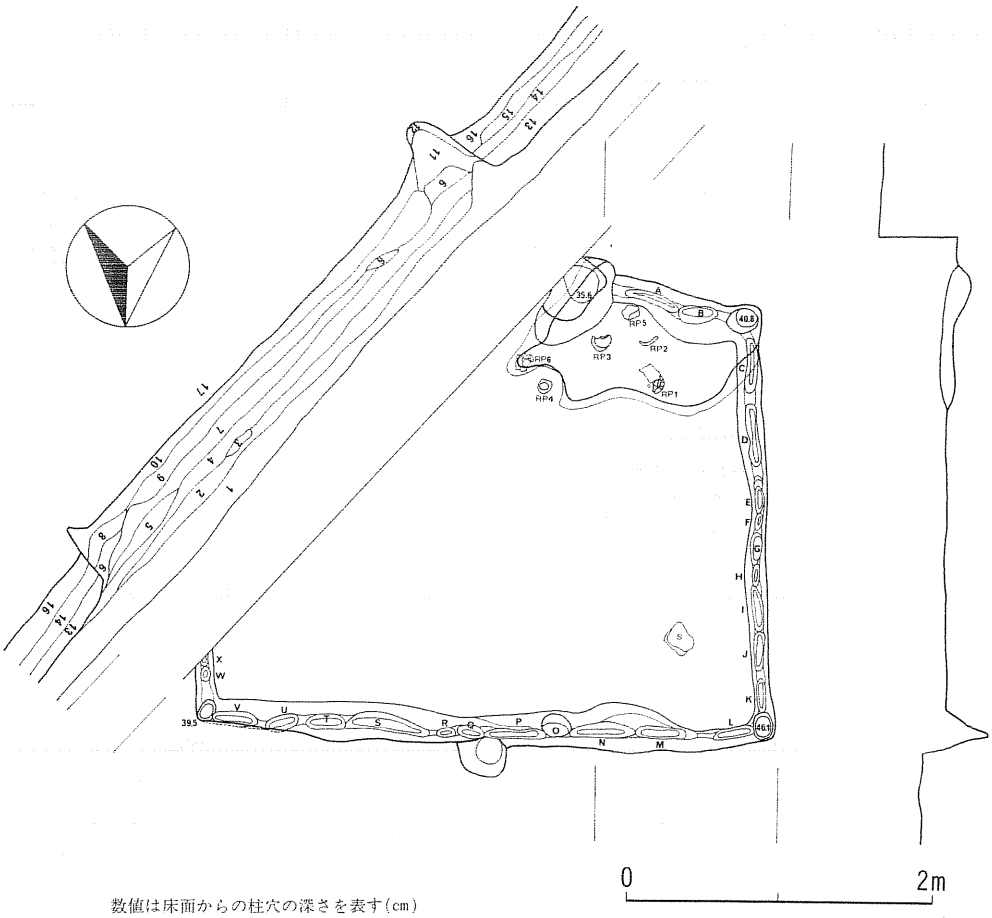
遺物は，土師器片13点，自然石（礫片）４点の20点出土しているが，埋土中からの出土が多い。土師器は甕形土器が大部分で坏形土器は少ない。図化できたのは甕形土師器２点である。



第18図　第２号土壙出土遺物実測図

１（ＲＰ５）は胎土に砂粒を含み，轆轤を使用してつくられた甕形土師器であるが，器外面は火熱による剝落が認められる。口縁部は外反したあとわずかに直立する。推定口径18cm，現高5.9cmを計測し，両面とも淡橙色を呈する。２（ＲＰ13）は，粘土紐巻上げ痕が器外面に認められ，胎土に礫を多量に含む。両面を指で粗くなでただけである。推定口径19.4cm，現高6.3cmを計測し，浅黄橙色を呈する。３（ＲＰ６）は，甕形土師器底部破片で木葉痕が認められる。

第４号竪穴住居跡（ＳＩ004）（第19図・20図，図版７）



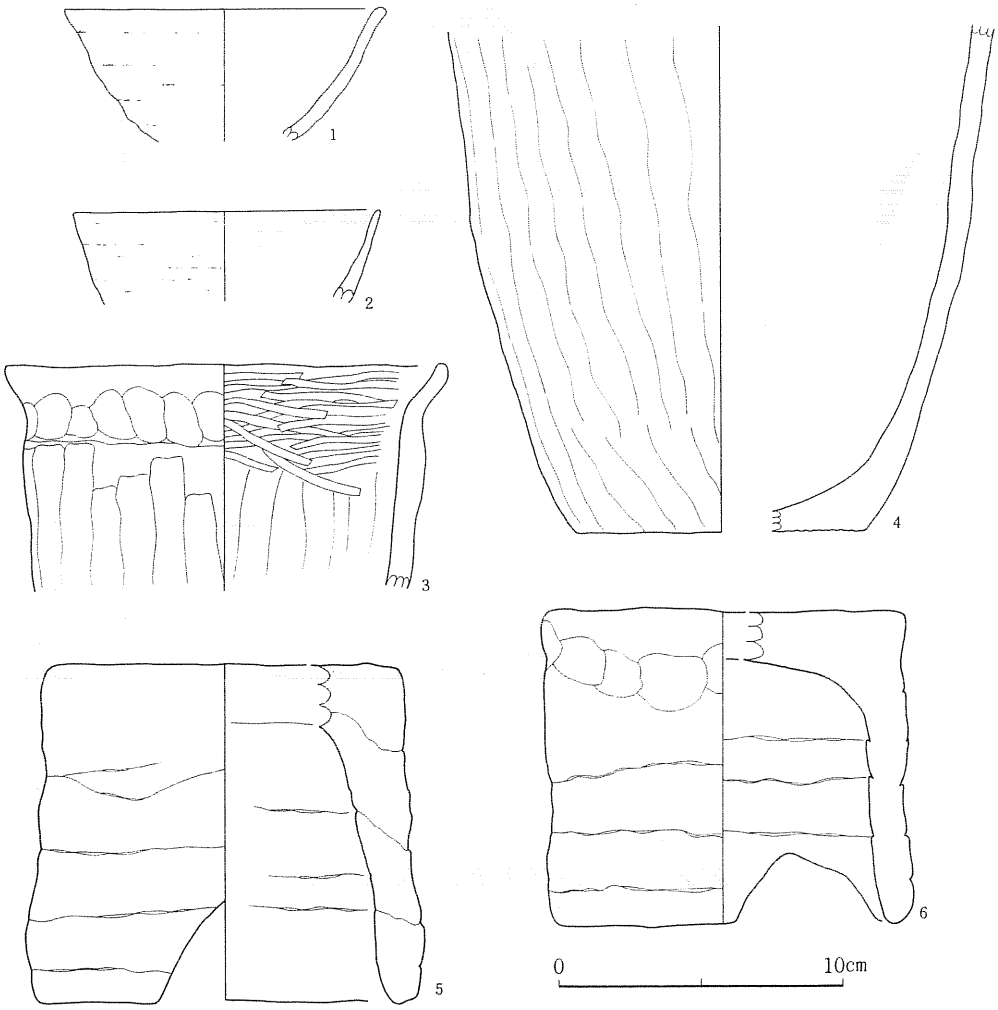
数値は床面からの柱穴の深さを表す(cm)

第19図　第４号竪穴住居跡（SI004）実測図

範囲確認調査No.４トレンチでかまど部分が検出され，土製支脚・内黒坏形土師器・甕形土師器が出土していたもので，本調査17―Ｄ・Ｅの両グリッドと隣接畑地にまたがり検出されたが，路線範囲外は調査できないため全容を確認することはできなかった。

北東側から南西側へ傾斜する緩斜面に構築された竪穴住居跡は，主軸方位Ｓ―3°―Ｅ，東側

壁長383cm，南側検出部壁長128cm，東側検出部壁長37cmで，図上で推定すると東側壁362cm，南側壁308cmとなり東西方向が長い長方形プランを呈する。プラン確認面での検出部分の面積は8.48m²であるが，9.88m²と推定されている。プラン確認面から床面までの深さは，西側壁で2.6～8.2cm，北側壁で17.2～24.6cm，東側壁で29.2～31.1cm，南側壁で1.2～2.5cmである。（隣接地との境界線での土層堆積状況の観察では，東側壁32cm，南側壁34cmを計測できる。）各壁面は７～13°の範囲で外傾する。埋土は12層に分層できた。　１：暗褐色（耕作）土　２：黒褐色土　３：シルト質火山灰ブロック　４：シルト質火山灰微量混入黒褐色土　５：暗褐色土　６～10：黒褐色土　11・12：暗褐色土　住居は13（暗褐色土）層上面から，14（黒褐色土）・15



第20図　第４号竪穴住居跡出土遺物実測図

（褐色）・16（黄褐色）と掘り下げ，地山であるローム層まで掘り込んでいる。床面は平坦で非常によく踏み固められている。柱穴は各壁隅部に検出されている。柱穴の上端平面形はいず

れも小判形を呈し，平均の長軸18cm，短軸13cm，深さ42.1cmと平面形の規模が小さい割に深い柱穴である。北側壁中央部の壁際の柱穴は住居跡より新しいものである。南側のかまどの粘土・焼土下に検出されたピットは，柱穴である可能性が強い。この場合隅部の柱穴とこのピットはかまどをはさんで立つことになる。かまどは南側壁の南西隅部近くに構築されているが，その原形は失われている。

各壁の下方には壁溝が掘り込まれているが，床面から1.5～18.6cm（平均8.7cm）掘り込んだあとで長楕円形に更に深く掘り込まれている。長楕円形に掘り込まれた部分の深さはＡ：22.3cm，Ｂ：20.4cm，Ｃ：16.5cm，Ｄ：24.3cm，Ｅ：25.5cm，Ｆ：24.9cm，Ｇ：25.1cm，Ｈ：15.7cm，Ｉ：21.2cm，Ｊ：17.6cm，Ｋ：19cm，Ｌ：31cm，Ｍ：25.9cm，Ｎ：24cm，Ｏ：16cm，Ｐ：28.6cm，Ｑ：25.1cm，Ｒ：23.3cm，Ｓ：19.5cm，Ｔ：18.5cm，Ｕ：21.4cm，Ｖ：32.9cm，Ｗ：24.9cm，Ｘ：20.2cmを計測する。Ｏは深さはあまりないが，その形態から柱穴となる可能性もある。

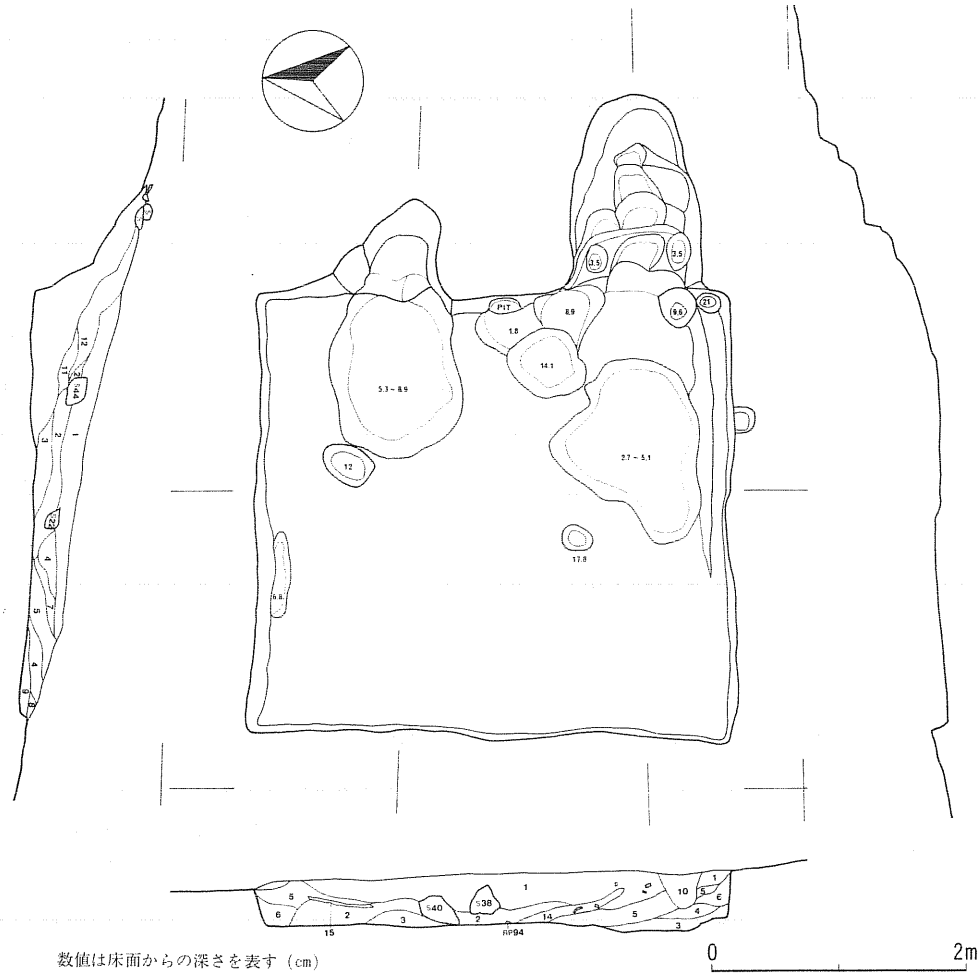
遺物は極めて少なく，かまど粘土中からの出土がほとんどである。坏形土師器２点（１，２），甕形土師器２点（３，４），土製支脚２点（５，６）の６点が復原あるいは図上復原できた。

坏形土師器（１，２－ＲＰ６）は，いずれも轆轤を使用してつくられ細砂粒を含む。焼成は良好で，にぶい黄橙色～灰褐色を呈する。１は推定口径11.2cm，現高4.6cm，２は推定口径10.9cm，現高3.3cmを計測する。甕形土師器（３－ＲＰ１）は口縁部から胴部にかけての破片で粘土紐巻上げ後，指で器壁を両側から押圧して頸部を成形しており，指頭痕が残る。胴部は両面とも箆なでにより調整されている。口縁部の内面は細かい箆なでで外面は成形時のままである。（４－ＲＰ６）は胎土に砂礫を含む胴部から底部にかけての破片である。底部には砂粒が全面に付着している。３は推定口径15.7cm，現高８cm，４は推定底径10.2cm，現高18cmを計測する。

土製支脚（５－ＲＰ２）は，胎土に砂礫を多量に含み，切込みが相対して２ヵ所につくられている。火熱のため外面には細かい亀裂がある。（６－ＲＰ５）は，５と同じく砂礫を多量に含み火熱による亀裂があり，現状では切り込みが２ヵ所認められるものの，位置関係から３ヵ所と推定される。５は直径13cm，高さ12.1cm，６は直径12.9cm，高さ11.2cmを計測する。

図化していないが，ＲＰ４は轆轤を使用した小型甕形土師器の底部破片で，回転糸切り痕がある。

第５号竪穴住居跡（ＳＩ005）（第21図～第27図，図版７）



第21図　第５号竪穴住居跡（SI005）実測図

13―Ａ・Ｂ，14―Ａ・Ｂの各グリッドにまたがり検出されたが，地山面が東側から西側へかなり急傾斜しているため，プランの確認が遅れ，西側壁面上部をかなり削平してしまった。また当初東側壁の張り出し部を２つのかまどと理解し，調査を進めたが，調査の結果北側の張り出し部がかまど，南側が出入口と判明した。

主軸方位Ｅ―２°―Ｓで東側壁長370cm，北側壁長348cm，西側壁長378cm，南側壁長357cmの，ほぼ方形に近いプランを呈する。プラン確認面での面積は15.02㎡をはかる。プラン確認面から床面までの深さは，東側壁で54.4～57cm，北側壁で4.7～54.4cm，西側壁4.7～12.7cm，南側壁で12.7～57.0cmをはかり，各壁面は８～28°の範囲で外傾している。埋土は15層に分層できる。

１：炭化物多量混入暗褐色土　２：炭化物微量混入黒褐色土　３：炭化物微量混入暗褐色土
４：黒褐色土　５：炭化物多量混入黒褐色土　６～８：褐色土　９：黒褐色土　10：黒色土

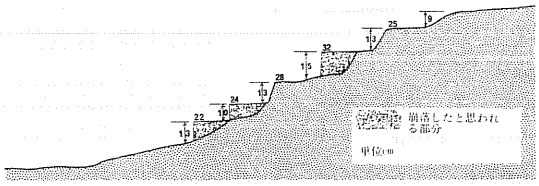
11：褐色土　12：炭化物微量混入極暗褐色土　13：暗褐色土　14：炭化物多量混入黒褐色土　15：地山ロームブロック　堆積状況を図化した土層堆積断面図からは，自然営力によるレンズ状堆積の埋没と観察されるのであるが，土器片・自然石の出土状況も加えて検討すると，土器片は中央から南側壁近くに集中し，壁下方の初期埋没土中に少なく，その後の堆積層中に多いこと，44個・総重量305.9955kgの自然石が床面中央部上の埋土１・２層中に集中する傾向があることから，自然営力による堆積よりも，廃品となった土器や自然石を数回にわたり投棄し，人為的に徐々に埋没させたかあるいは，埋めながら土器・自然石を投棄していったと推測される。

床面は，よく踏み固められており平坦であるが，南側壁下床面は幅10cmで中央部から東側に向かって上昇するスロープになっている。

柱穴状ピットは中央部の南・北に各１穴，東南隅部２穴の計４ヵ所が床面に，東側壁中央部で傾斜する壁面を垂直に穿っている１穴の他に張り出し部に１対が穿たれているが，いずれも浅い。

かまどは東側壁中央からやや北寄りに付設されているが，両袖等主体部は崩壊して原形を失っている。長軸が壁面との直交線に対し6°南に偏して，壁面を幅96cm，奥行72cmの半楕円形に外部地山面を掘りくぼめて煙道部となし，内部床面を短軸100cm，長軸124cmの楕円形に5.3～8.9cm掘りくぼめたあと主体部を構築している。煙道部が短く，急上昇する所謂関東型を呈する形態であるが，煙道部は焚口側から59°→29°→36°と３段階になって上昇する。両袖部芯材と煙道部天井部には甕形土師器，大型広口壺形須恵器の大破片を利用している。

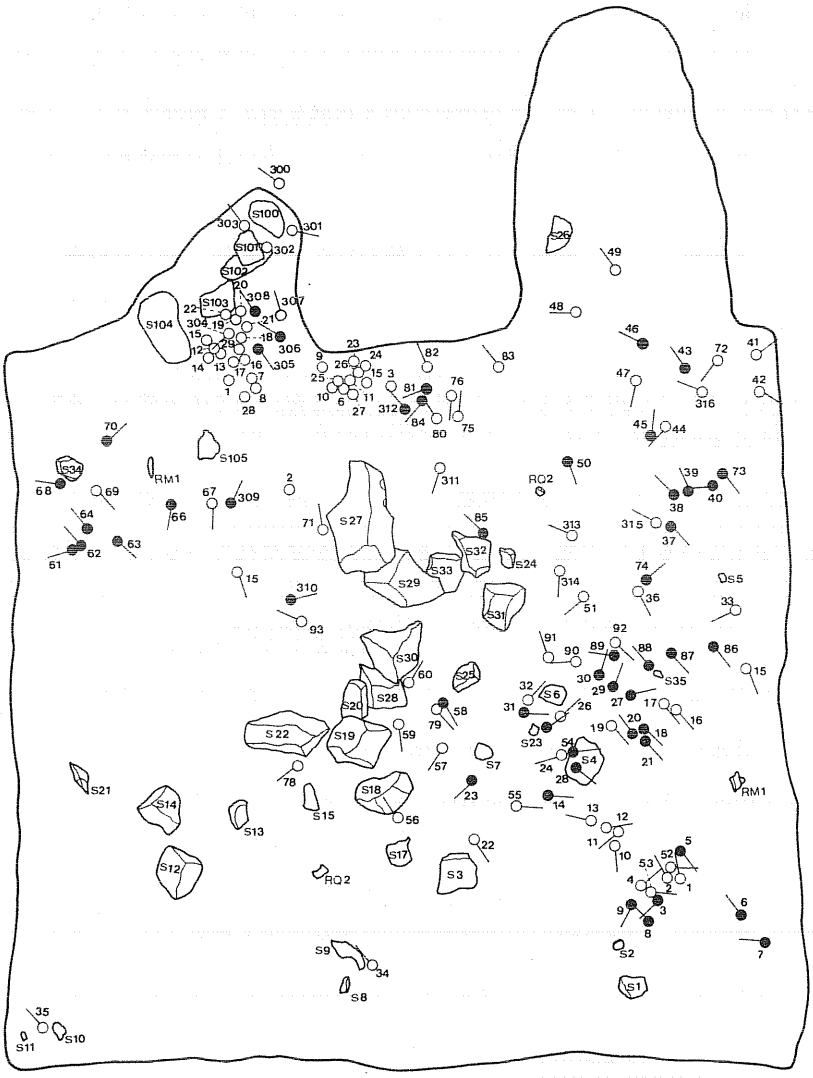
東側壁の東南隅部付近に幅113cm，奥行155cmの半楕円形に外部地山面を掘りくぼめ，底面が階段状を呈する張り出し部が付設されている。この張り出し部の階段に続くように竪穴本体の床面の幅88cm，奥行54cmの範囲が15°の角度のスロープとなり，その前面に奥行148cm，幅119cm，深さ2.7～5.1cmの不整な掘り込みがある。張り出し部の階段状底面には崩落痕跡と観察される部分もあり，本来の階段の各段の高さと奥行は第22図のように復原できる。



第22図　「階段部」模式図

張り出し部の基部には，左・右１対の浅い柱穴状ピットが掘り込まれており，２穴の底の間隔は56cm，中心での間隔は70cmである。この張り出し部は柱穴状ピットの底と同じ径の柱を建てたとしても56cmの幅をもつことから人間の出入りには支障がなく，また，復原されたような階段であれば昇降にも支障がないことから出入口と推定される。

北側壁の中央からやや西側の床面に壁面に沿うように長さ68cm，幅13cm，深さ6.8cmの溝が



第23図　第５号竪穴住居跡遺物出土分布図(1)

掘られている。

遺物は，坏形土師器，甕形土師器，鍋形土師器，壺形須恵器，刀子，鉄滓と自然石が多量に出土した。平面分布図で遺物の出土状況を観察すると，①かまど中とかまど右側，②住居中央から南側に土器が多く分布し，③自然石は住居中央から北西隅部にかけて分布している。これを垂直分布図で観察すると，①はかまど燃焼部へ流入土中の土器と芯材あるいは架構材として使用された土器・自然石，かまど右袖付近の床面近くの初期埋没土中の土器であることがわかる。（かまど中・周辺から出土した遺物には頭にＫを付す。）②は，床面上の土器は少なく，南東側から流入あるいは投・廃棄された状態を示している。③は当初，屋根材を押えるために置かれた石が住居廃棄後に崩落したものと考えられたが，各個の重量と中央部から北西隅部にかけての限られた分布状況から，投・廃棄されたものと判断した。

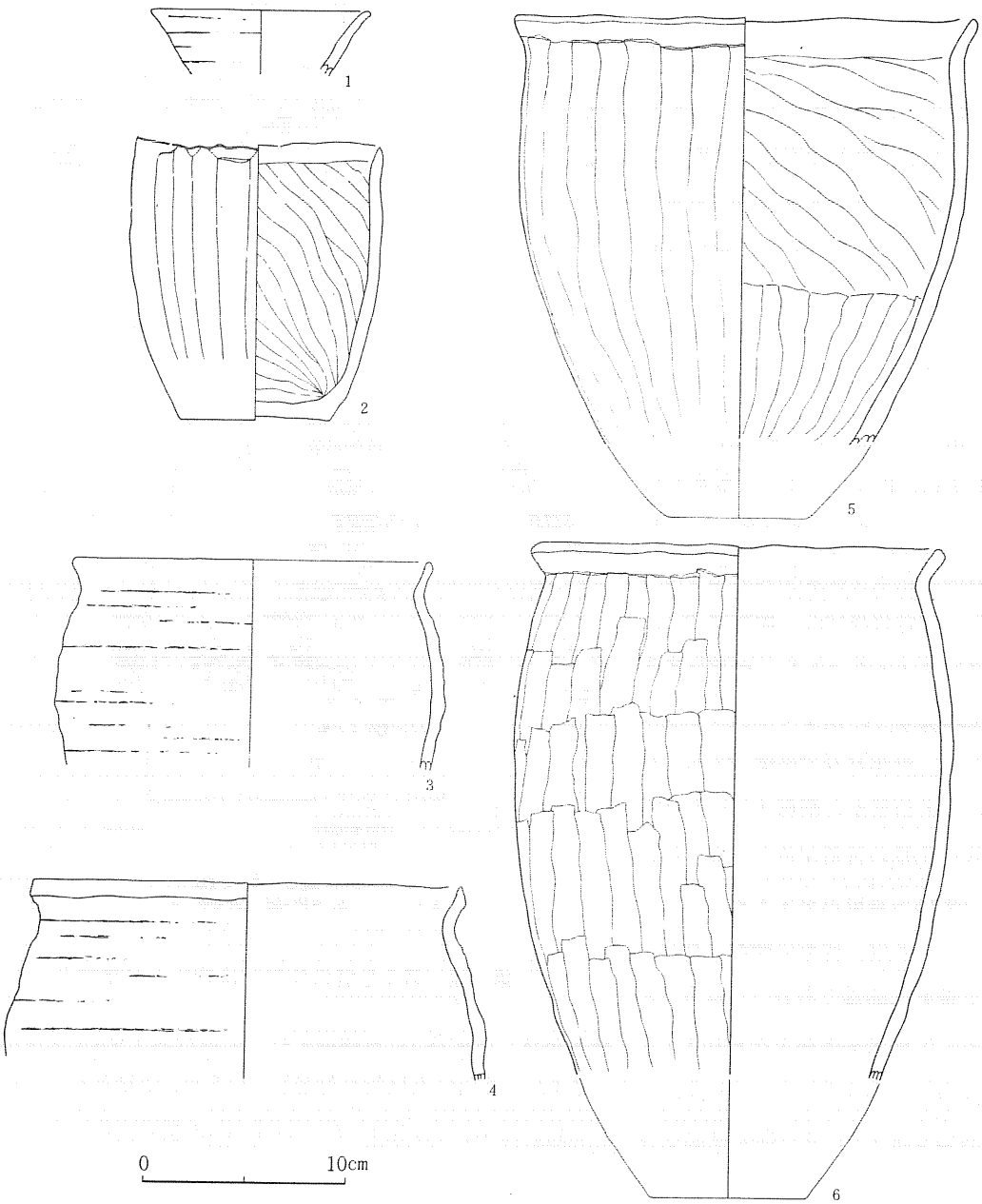
坏形土師器１は，かまど右袖部外側の初期流入土中から出土したＫＲＰ10で，推定口径15.8cm，現高3.3cmを計測する。体部が大きく外反するプロポーションをもつ。胎土に細砂粒をわずかに含み，焼成良好である。浅黄橙色を呈する。

小型の甕形土師器２は，ＲＰ78・ＲＰ309・ＫＲＰ２・ＫＲＰ19・ＫＲＰ24・ＫＲＰ304・ＫＲＰ308の接合資料である。ＲＰ78とＫＲＰ２は口縁部破片，ＫＲＰ304が底部破片，他胴部破片である。ＲＰ78は床面中央部北西寄りの埋土２層中，ＲＰ309はかまど焚口部前くぼみ下底，ＫＲＰ24は右袖部外側初期流入土中ＫＲＰ２・ＫＲＰ19・ＫＲＰ304・ＫＲＰ308は燃焼部から煙道部にかけての崩落土中からの出土である。粘土紐巻上げで成形され，箆なでによって整形されている。口唇部内側は箆による横方向かきとりにより尖鋭化している。推定口径12cm，器高13.7cm，底径7.4cmをはかり，底部は若干上底となり，指なでされて平滑である。焼成良好で堅緻である。両面とも口唇から胴部上半にかけ煤状炭化物の付着がみられる。にぶい褐色～黄橙色を呈する。

第24図　第５号竪穴住居跡遺物出土分布図(2)

３～５は，成形に轆轤を使用した甕形土師器である。３はＲＰ59として中央部床面上から出土した。轆轤水挽き痕が残り，口縁部がわずかに外反するが，３は指で内湾気味に外傾させている。小礫が含まれ，外面に炭化物が付着しているが，淡橙色～にぶい褐色を呈する。３の推定口径17.5cm，現高10.5cm。４はＫＲＰ５・ＫＲＰ306の接合資料である。ＫＲＰ306は右袖部芯材，ＫＲＰ５は右袖部外側初期流入土中の出土である。轆轤を使用して成形しており，胎土に砂礫を含まない。口縁部を外反させたあと，１cmの幅で口唇部外側を垂直にかきとりし，尖鋭化させている。焼成は良好でにぶい橙色を呈する。推定口径21.2cm，現高9.7cmを計測するが，口径より胴径の方が大きい。５は底部を欠失した甕形土師器で，ＫＲＰ７・Ｋ

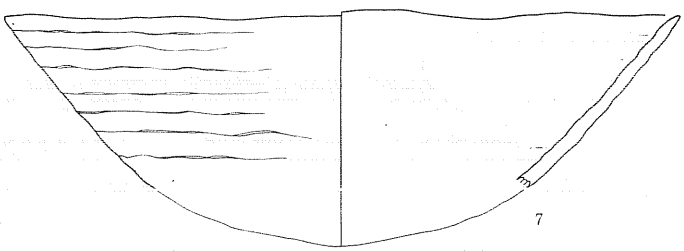
ＲＰ305・ＫＲＰ308の接合資料である。ＫＲＰ７は焚口部から出土した胴部破片，ＫＲＰ305は口縁部破片，ＫＲＰ308は口縁部から胴部にかけての破片でともに燃焼部内からの出土である。粘土紐巻上げによる成形で，胎土に小礫が多く含まれ，器面にも露出しているためザラザラし

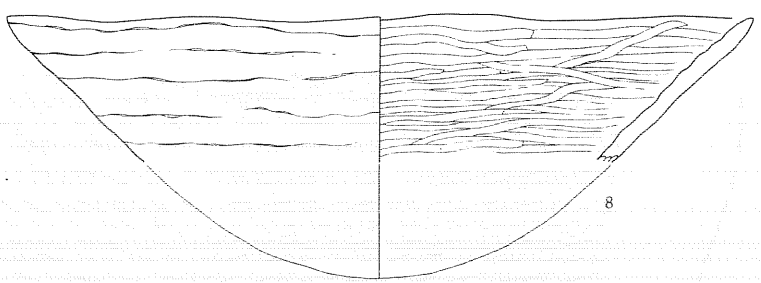


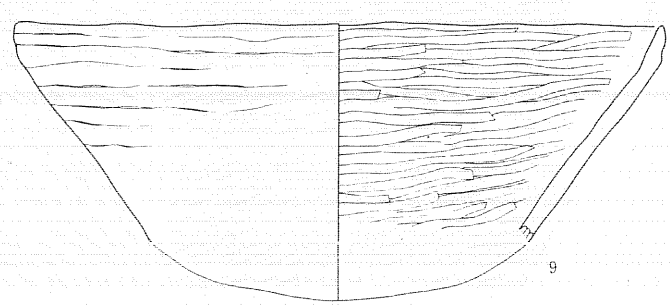
第25図　第５号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)

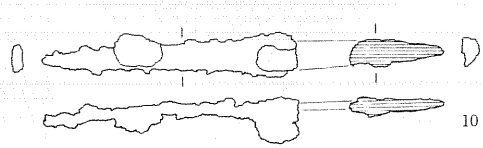
ている。口縁部は指なでされているが口唇は箆で横なでされている。胴部は両面とも箆なでによる整形である。浅黄色～にぶい黄橙色を呈するが器外面は二次火熱による剥離が見られる。

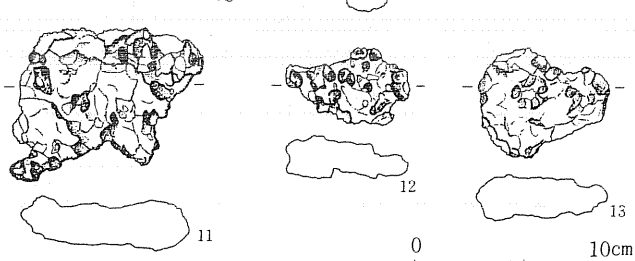
口径22.6cm，現高21.3cmを計測する。６は，粘土紐巻上げにより成形されたと考えられる底部を欠失した甕形土師器で，ＫＲＰ16～18・22・27・29の接合資料である。ＫＲＰ16・17は口縁部破片，ＫＲＰ18は胴部破片でいずれも焚口部から出土した。ＫＲＰ22は胴部破片，ＫＲＰ29は口縁部破片でいずれも燃焼部中から出土した。ＫＲＰ27は右袖外側の初期流入土中からの出土である。胎土に細砂を含むが目立たない。器外面が細かい箆削り，器内面が指によるなでで整形されている。焼成良好でにぶい黄褐色～赤褐色を呈するが，器外面胴部下半に煤状炭化物が付着している。口径19.6cm，現高26.5cmを計測する。７～９は鍋形土師器である。３個体とも底部を欠失するが，体部下半に黒斑が巡っており，かまどにかけたものと判断し，鉢形土師器とは区別した。７はＫＲＰ15・20・303の接合資料で，ＫＲＰ15が口縁部破片，ＫＲＰ20が口縁部から体部にかけての破片（４点）で燃焼部から出土し，ＫＲＰ303は口縁部から体部にかけての破片で煙道部からの出土である。粘土紐巻上げにより成形され，器外面は指と箆による縦方向のなでつけ，器内面は箆みがきにより整形さ





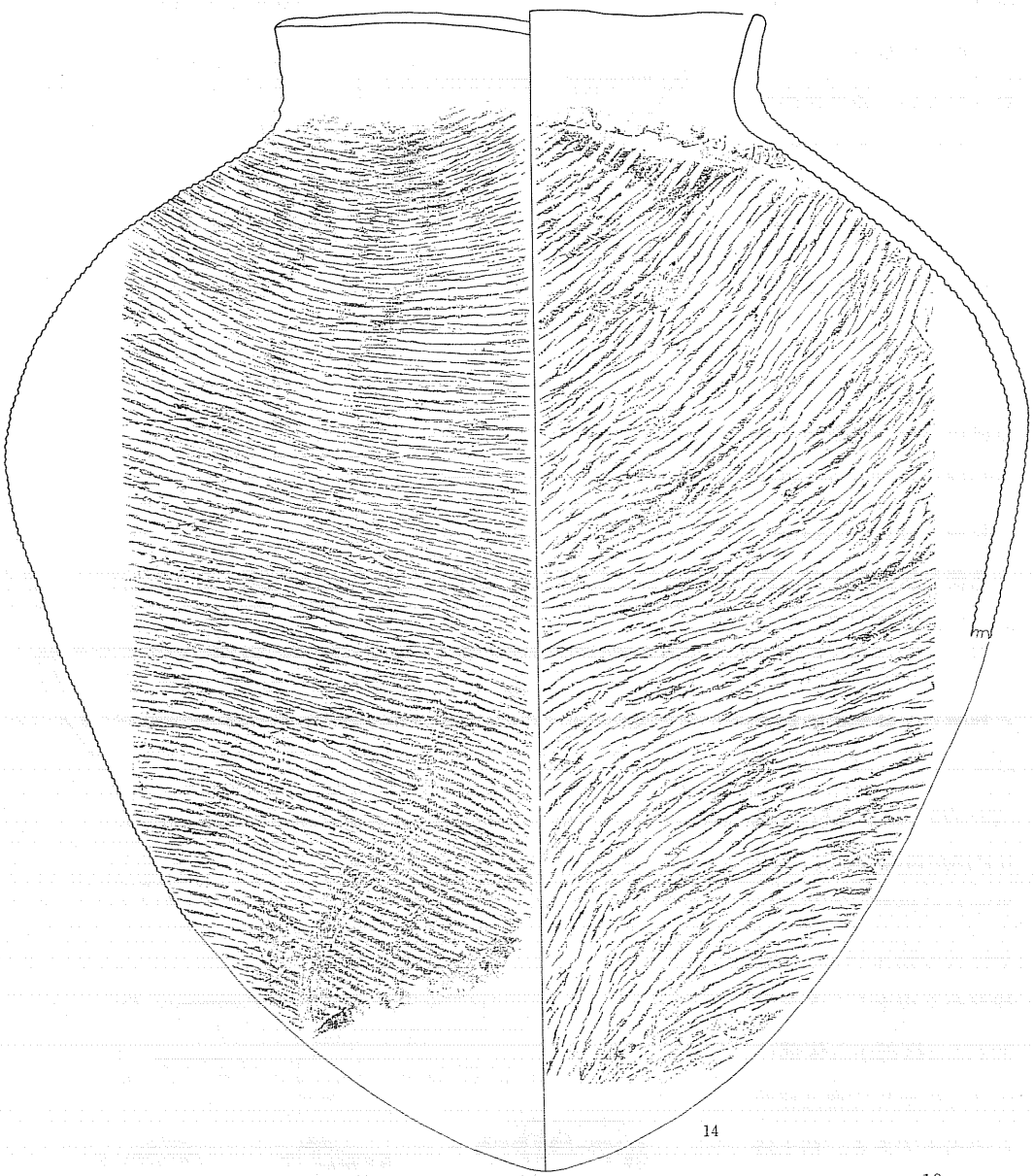






第26図　第５号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

れている。胎土に砂粒を含み，焼成良好で，色調は橙色～にぶい橙色を呈するが外面体部下半に黒斑が認められる。また外面は斑状に色調変化している。推定口径35cm，現高9.2cmを計測する。８は竪穴中央部の床面に近い埋土中から出土したＲＰ57・58・94（いずれも口縁部破片）の接



第27図　第５号竪穴住居跡出土遺物実測図(3)

合資料である。粘土紐巻上げにより成形され，器外面は軽く粘土紐間を指でなでているだけで，器内面は，巻上げ痕を箆で押えつけるようになでている。胎土に砂礫が多く含まれているが，焼成良好で堅緻である。色調はにぶい橙色～浅黄橙色であるが外面体部下半に黒斑が巡る。推

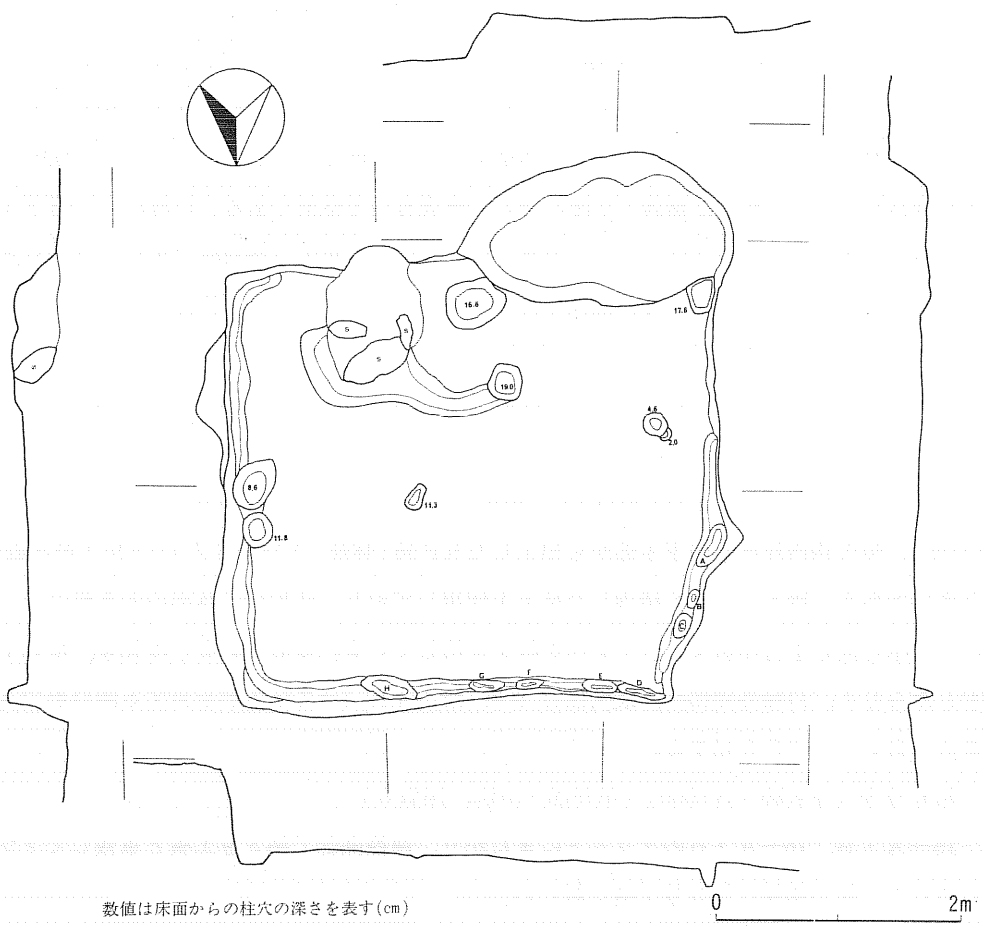
定口径39cm，現高7.6cmを計測する。９は竪穴南西部埋土上半部から出土したＲＰ19（体部）・ＲＰ28（口縁部から体部）・ＲＰ16（体部）・ＲＰ17（口縁部から体部３点）とかまど燃焼部から出土したＫＲＰ13（口縁部），かまど右袖外側の埋土中から出土したＫＲＰ６とＫＲＰ９（ともに口縁部）の接合資料である。粘土紐巻上げにより成形され外傾する体部が口縁部で垂直に近く立ち上がる。器外面は巻上げ痕が残るくらいの縦方向の軽い箆なで，器内面は横方向の細かい箆なでが行われている。胎土に細砂と小礫を含み，焼成良好で堅緻である。口縁部の口唇下５cmまでは一巡，体部下半３cmには部分的に黒斑が認められる。推定口径34cm，現高11.4cmを計測する。10（ＲＭ１）は，かまど焚口部前床面から出土した刀子である。柄部が一部欠損し，全長は不明であるが刀身部現長13.3cm，柄部現長4.9cmを計測する。柄部には木質部が遺存している。11～13は鉄滓であるが，11・12は刀子と共伴し，13はＲＰ62として記録されているが，埋土下半部からの出土である。14は広口壺形須恵器で，かまど右袖外側埋土中出土のＫＲＰ24（口縁部から体部），かまど煙道部天井の架構材として使用されていたＫＲＰ300（口縁部～体部）とＫＲＰ302（体部），竪穴南西部埋土中下半部から出土したＲＰ96（体部）と14―Ｃグリッド出土品体部の接合資料である。胎土にはよく精選した粘土を使用しており，成形後の体部の叩き締めは，内部の当て木と同じ平行叩目文をつくる叩き板を使用している。整形中あるいは乾燥・焼成中に変形したらしく，口縁外周65cm，最大径21.8cm，最小径19.5cmで楕円形を呈する開口部である。焼成は良好で灰白色を呈する。

第６号竪穴住居跡（ＳＩ006）（第28図～31図，図版８）

15―Ａ・Ｂ，16―Ａ・Ｂのグリッドにまたがり，南西隅部で第３号土壙と重複してプラン確認された。新旧関係は第３号土壙が新しい。

主軸方位Ｓ―1°―Ｗで東側壁長361cm，北側壁長355cm，西側壁は南隅部が不明であるが，推定390cm，東側壁長も中央から西側が不明であるが推定408cmのほぼ方形を呈するプランである。プラン確認面での面積は推定14.84㎡（現況14.26㎡）をはかる。プラン確認面から床面までの深さは，東側壁で48～67.9cm，北側壁で3.6～58.5cm，西側壁で2.8～7.6cm，南側壁で18.5～48cmをはかり，各壁面は８～27°の範囲で外傾している。埋土は炭化物を微量混入する暗茶褐色土で数層に分層が可能であったが，調査中の豪雨のため斜面上方から流入する水の圧力でベルトが崩壊し実測図化が不可能となった。

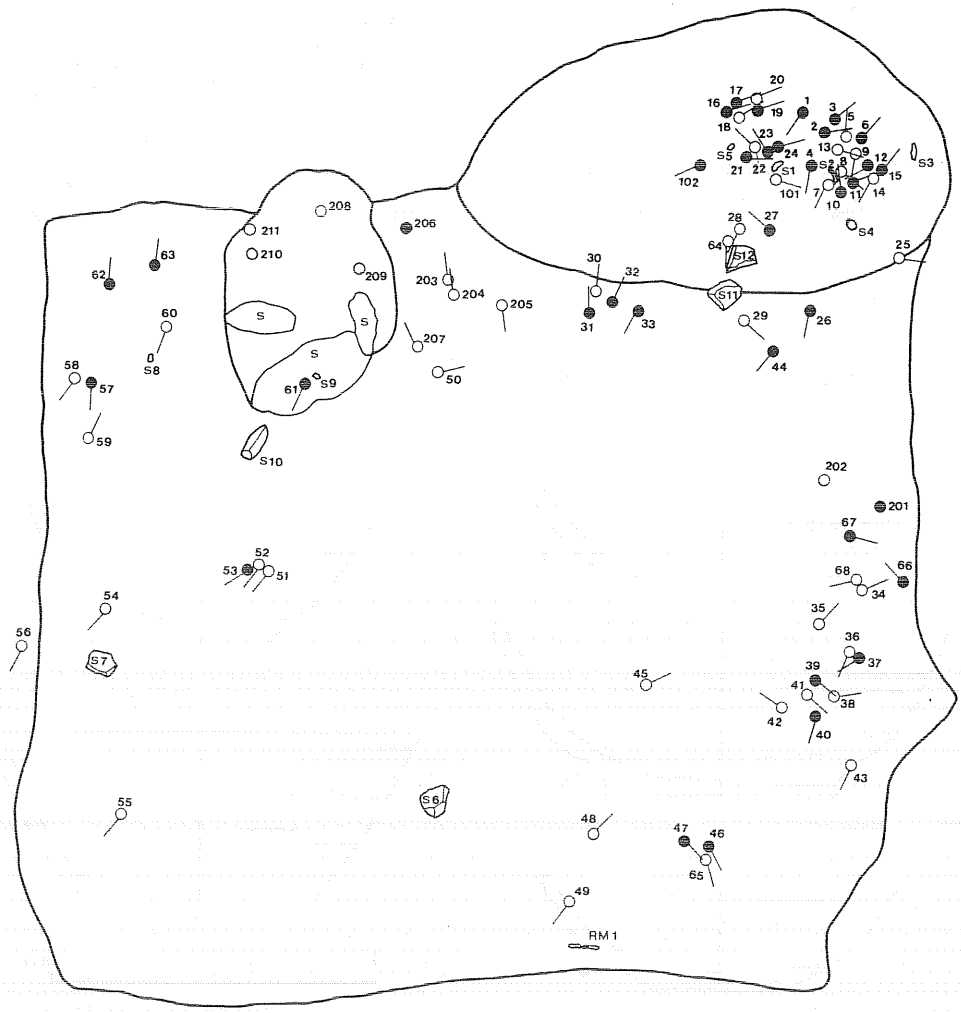
床面は小さな凹凸はあるが，巨視的には割合平坦である。中央から東側半分の床面がよく踏み固められているが，西側半分は軟弱である。柱穴状ピットは床面に７ヵ所検出されたが規則性は見られず比較的浅いものが多い。南側壁面を除く各壁面床面には壁溝が掘り込まれている。東側壁下では上幅８～15cm，深さ2.7～4.0cm，北側壁下では上幅10～17cm，深さ4.0～11.1cm，西側壁では中央部から南側には検出できなかったが，上幅10～13cm，深さ７～12cmを計測する。



第28図　第6号竪穴住居跡(SI006)・第3号土壙(SK003)実測図

北側と東側の溝の中には，長楕円形を呈するピットが穿たれている。その深さは，A：16.8cm，B：11.6cm，C：13.3cm，D：14.4cm，E：15.8cm，F：15cm，G：12cm，H：15.4cmである。

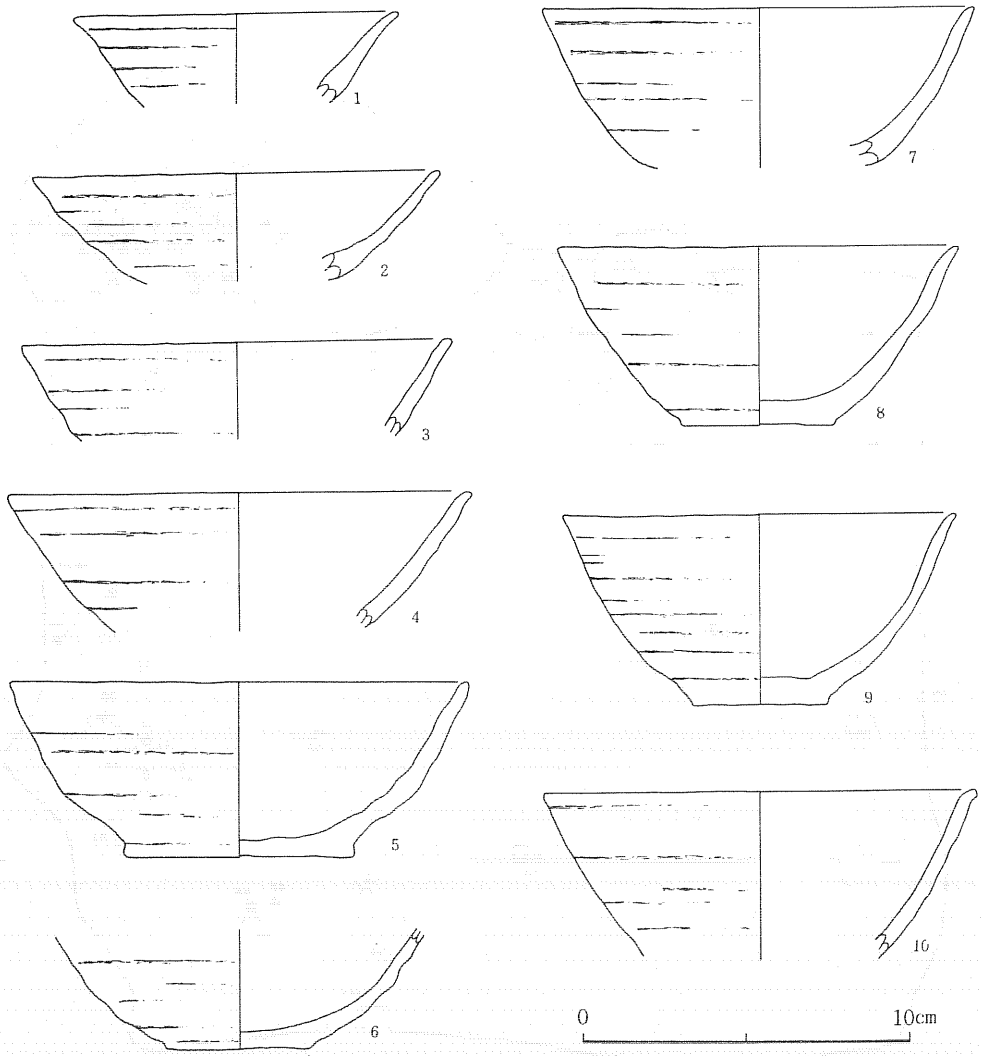
かまどは南側壁中央部からやや東側に付設されている。かまどは壁に接して幅45cm，奥行38cm，深さ4cmの鍋底状を呈する燃焼部とその前面の幅70cm，奥行67cm，深さ5.9～8.3cmの方形を呈する焚口部が掘りくぼめられたあと両袖が積み上げられ，天井を覆い，煙道部が短く，65°で立ち上がったあと40°で急上昇して煙出孔に向かう所謂関東型を呈するものである。両袖部には扁平な自然石各1個と甕形土師器大破片を直立させて芯材とし，地山ローム・粘土で被覆している。焚口部では，天井部にのせていたと思われる扁平で長楕円形を呈する自然石が崩れ落ちた状況で検出されている。天井部の被覆材は粗い砂礫を混入する粘土（あるいは地山ローム）であったらしいが，熱変化しており判別できなかった。掘りくぼめられた焚口部から幅20～28



第29図　第６号竪穴住居跡・第３号土壙遺物出土分布図

cm，深さ5.9cmの溝が，西側の柱穴状ピットに連続している。

遺物の出土状況を平面分布図で観察すると，各側壁沿いに約60cmの幅で分布し，住居跡の中央部は空白となっている。垂直分布を観察すると床面上と初期埋没中に多いことから，廃棄直後に投・廃棄された遺物が多いと解釈できる。これは接合関係からも考えることが可能である。坏形土師器６は西側壁沿いのＲＰ26＋ＲＰ44＋ＲＰ46＋ＲＰ40の接合資料である。ＲＰ26とＲＰ46は2.5ｍ隔てている。坏形土師器７は西側壁中央部近くに分布するＲＰ35＋60＋66＋202の接合資料である。同じく坏形土師器９はＲＰ25とＲＰ45の接合したもので，2.3ｍ隔てている。甕形土師器11はＲＰ25とかまど中の破片が接合したもので2.7ｍ隔てている。この４点の接合関係



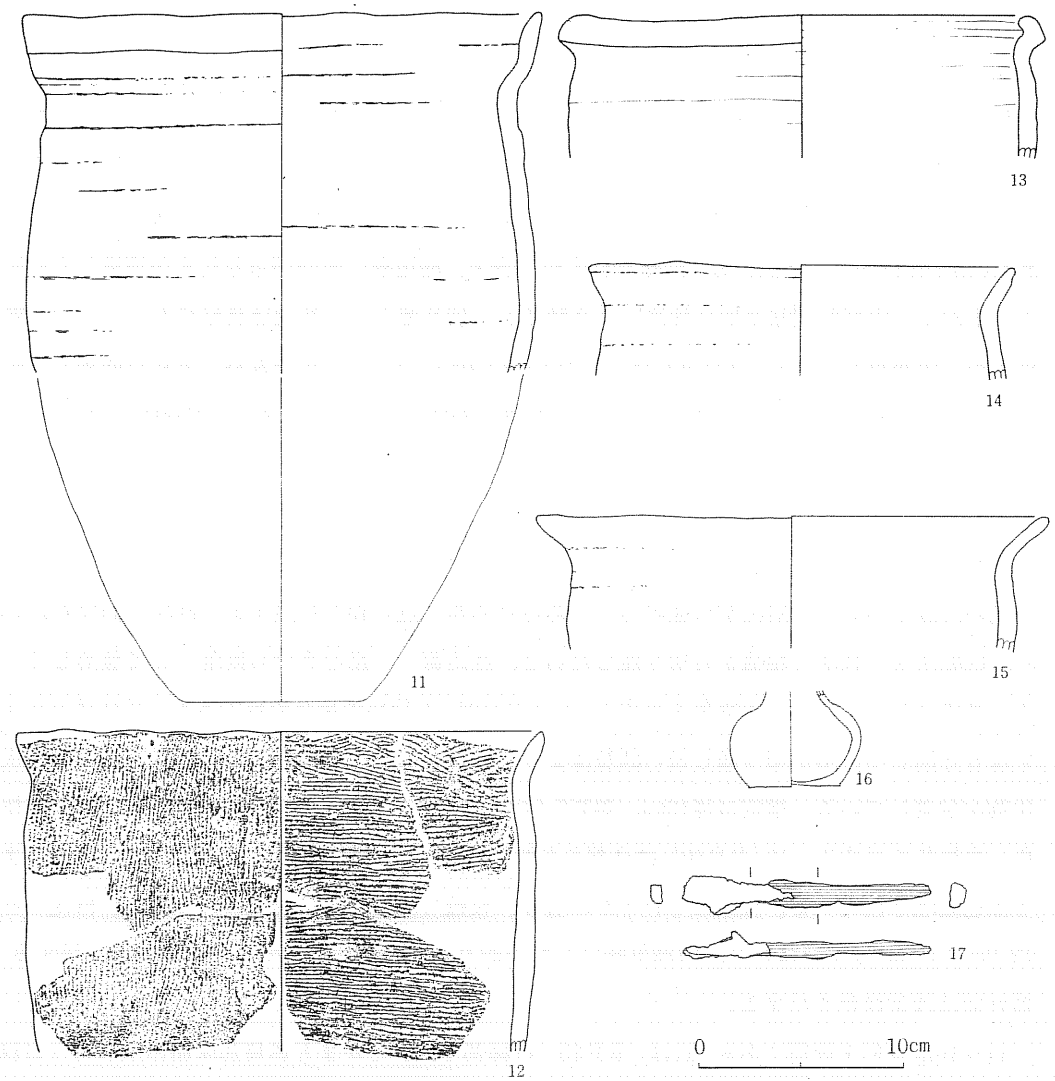
第30図　第６号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)

を観察すると決して住居中央部を越えて接合せず，それぞれの壁沿いで接合している。接合あるいは図上復原できた坏形土師器は10点にのぼるが，３点（６・７・９）を除き，南側壁沿いの初期埋土中から出土している。１（ＲＰ31）と２（ＲＰ62）は器高が低く，口径に比して底径の大きい坏形土器と推定される。胎土に砂粒をわずかに含み，轆轤により成形されたもので焼成は良好である。１は推定口径10cm，現高2.8cmで浅黄橙色を呈する。２は推定口径12.4cm，現高3.4cmで橙色を呈する。３（ＲＰ32）と４（ＲＰ203）は体部から口縁部にかけて直線的に大きく外傾している。３は推定口径13.2cm，現高３cmを計測し，胎土に砂粒をわずかに含み，轆轤で成形され，浅黄橙色を呈する。４は推定口径14cm，現高4.2cmで，胎土に砂礫を少量含み橙色

～灰褐色を呈する。轆轤で成形されており，焼成はやや不良である。５（ＲＰ33）は完形に近い状態で正立して出土している。口径14cm，器高5.4cm，底径6.9cmでやや厚手な胎土には砂粒を多量に含み，器肌がザラザラしている。底辺部に凹凸がみられるが湾曲しながら立ち上がる体部に，成形後，回転糸切り技法により轆轤から切り離され，焼成は良好である。色調は浅黄橙色を呈する。６はＲＰ26（２片）・ＲＰ40・ＲＰ44・ＲＰ46の接合資料であるが，底径4.6cm，現高3.7cmで体部上半を欠失する。砂礫をわずかに含み，底辺部に凹凸がみられるが湾曲しながら立ち上がる。成形後回転糸切り技法により轆轤から切り離され，焼成は良好である。にぶい黄橙色から灰褐色を呈する。７はＲＰ35・ＲＰ66・ＲＰ68・ＲＰ202の接合資料であるが底部を欠失する。推定口径13.2cm，現高4.9cmを計測し，轆轤で成形されている。胎土に細砂粒をわずかに含み，焼成は良好である。橙色を呈する。５・６と違い器面がなめらかに成形され，口唇内側がやや外傾する。８はかまど燃焼部床面から出土したもので，推定口径12.2cm，器高5.5cm，底径4.7cmを計測する。湾曲しながら立ち上がる体部が体部中央あたりで屈曲したあと外反する。口径の½以下の底径で器高が口径の½弱であるため椀に近い器形を呈する。砂粒をわずかに含み，回転糸切り技法で轆轤から切り離したあと，底辺部の一部を手持ち箆削りして整形している。焼成は良好で橙色～灰褐色を呈する。９はＲＰ25・ＲＰ45の接合資料である。プロポーションは８と同じであるが切り離し後の調整はない。砂礫をわずかに含み，口縁部内側に煤状の炭化物が付着している。推定口径12cm，器高5.9cm，底径4.2cmを計測する。焼成良好でにぶい橙色～黒褐色を呈する。10（ＲＰ30）は底部を欠失するが，器内面と外面の口唇下１cmのあたりまで黒色処理されている。細砂粒をわずかに含み，轆轤で成形され，焼成良好である。推定口径13.2cm，現高5.2cmをはかり，内湾気味に立ち上がり，口唇部が外傾するため玉縁状を呈する。器外面は浅黄橙色を呈する。

11～15は甕形土師器である。11は，ＲＰ25（口縁部１点）とかまど燃焼部床面出土破片（口縁部１点，胴部６点）の接合資料である。幅13～19mmの粘土紐を巻き上げ（あるいは積み上げ）による成形で，轆轤は使用していない。頸部で外傾させたあと，また屈曲させ直立気味に立ち上がらせている。全面指なでで整形しているが，小礫が胎土に多く含まれ，器面に露出しているのでザラザラした器面となっている。焼成は良好で口縁部外面に炭化物が付着しているが，浅黄色～にぶい橙色を呈する。推定口径25.2cm，現高17.8cmを計測し，やや大型の甕形土器である。

12・13はかまど燃焼部床面から出土したものである。12は全面箆なでで整形しており，柾様の箆状工具の粗い目が残る。推定口径25.6cm，現高15.8cmである。焼成良好で浅黄橙色を呈する。13は口縁部に著しい特徴をもつ甕形土師器である。頸部で外傾させたあと口縁部上半を再び内傾させている。内側の屈曲部分は箆状工具で粘土の削りとりを行い１条の凹線を作出されている。内・外面とも箆なでして整形している。推定口径21cm，現高７cmをはかり，焼成良好



第31図　第６号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)

で橙色を呈する。14（ＲＰ37）と15（ＲＰ208）は，いずれも轆轤を使用しないで成形による。口縁部が大きく外傾した器面をもち，全面指なでにより整形されている。焼成は良好である。14は外面の口唇部下に１条の浅い凹線が巡る。推定口径10.5cm，現高5.5cmを計測する。15は推定口径24.6cm，現高6.7cmを計測する。16（ＲＰ65）は頸部以上を欠失する小型壺形須恵器である。轆轤で成形され，回転糸切り技法により切り離されている。肩部から体部にかけて自然釉の付着が認められる。焼成は良好で灰色を呈する。17は刀身の大部分を欠失し，柄部と刀身の一部が残る刀子である。全長12.2cmをはかり，木部は柄尻から８cm遺存している。

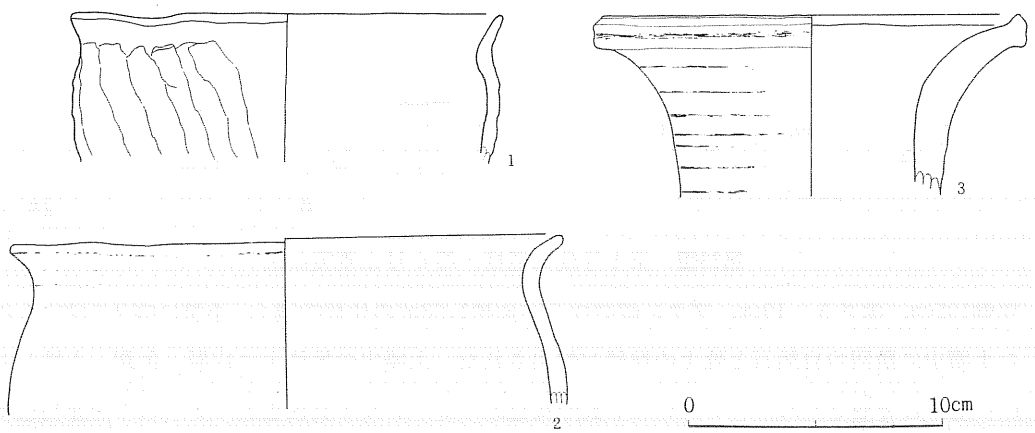
第３号土壙（ＳＫ003）（第28図・29図・32図，図版８）

15―Ａ・Ｂグリッドにまたがり，第６号竪穴住居跡と重複して確認されたが，本土壙が新し

い。長軸方位Ｅ―3°―Ｎ，長軸225cm，短軸125cm，深さ14.5～35.6ｍの楕円形プランを呈する土壙で，プラン確認面での面積は2.15m²である。底は平坦である。埋土は，焼土，炭化物多量混入暗褐色土であるが層区分できる状況ではなく坏形土師器，甕形土師器片，壺形須恵器片が多量に含まれていた。

遺物の出土状況を平面分布図で観察すると土壙の中心から西側にのみ，しかも壁面から15cm程度離れて，地山の傾斜方向に長軸を合わせるように楕円形に集中している。垂直分布を観察すると，この楕円形の集中も上に行く程広がりをみせていることがわかる。このことから，土壙が廃棄されたあと東側からの土の流入で西側壁側から堆積して埋没が進んでいる過程で土器・自然石が廃棄されたと考えられる。

土器は，甕形土師器片が大多数を占め，坏形土師器片，須恵器片は僅少である。復原あるい



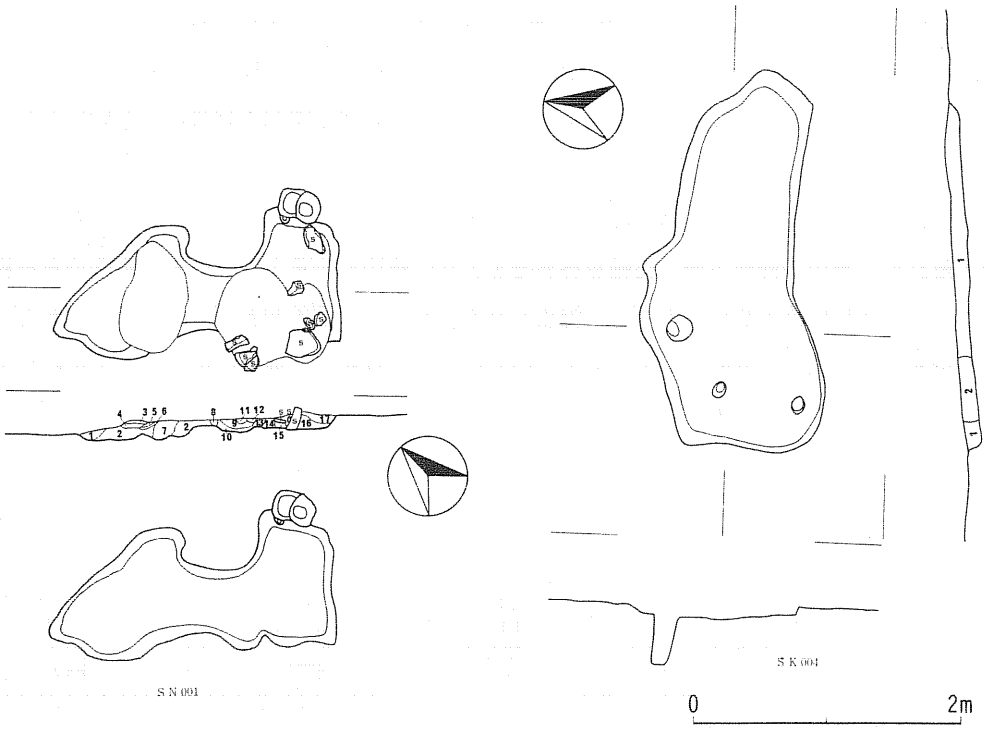
第32図　第３号土壙出土遺物実測図

は図上復原できたものは甕形土師器２点（１―ＲＰ11，２―ＲＰ１）と広口壺形須恵器口頸部１点（３―ＲＰ18・22・101）のみである。

１は粘土紐巻上げにより成形したあと，胴部を箆削りして整形した甕形土師器である。口縁部と内面は指なで調整されている。胎土に砂礫を含み，焼成良好である。推定口径17cm，現高5.9cmである。２は粘土紐巻上痕をていねいな指なでにより消去し，口縁部が大きく外湾する甕形土師器である。推定口径21.8cm，現高6.7cmである。焼成は良好である。３は肩部以下を欠失する大型広口壺形須恵器である。口縁部が大きく外湾したあと，口唇部が立ち上がる。口唇側面には細かい箆状工具による凹部が一巡する。胎土に砂礫の含有がなく緻密で焼成も良好であるが，胎土に残存する空気が焼成時の熱により膨張したため器壁の内部に空隙が見られる。また焼成時，窯室内に正立で置いたらしく自然釉が窯天井面に対向する部位に付着している。

第１号焼土遺構（ＳＮ001）（第33図）

18―Ｃグリッドで検出された性格不明の焼土遺構である。長軸方位Ｎ―42°―Ｗで，長軸215cm，



第33図　第１号焼土遺構・第４号土壙実測図

短軸105cm，深さ５～10cm，プラン確認面での面積1.53m²の比較的浅く，不整に掘りくぼめられた土壙中に数回の自然石と焼土の堆積が検出された。土壙中の堆積土は17層（色調・土性からは11層）に分層された。　１：シルト質暗褐色土　２：シルト質褐色土　３・11：明赤褐色塼質焼土　４・５・８・９・12・15：暗赤褐色焼土　６：シルト質暗褐色土　７：炭化物微量混入暗褐色土　10：焼土微量混入褐色土　13：シルト質黒褐色土　14：焼土微量混入暗褐色土　16：炭化物微量混入暗褐色土　17：焼土微量混入暗褐色土

遺物は，甕形土師器の胴部小破片が数点出土したにとどまる。

第４号土壙（ＳＫ004）（第33図）

16―Ｄ，17―Ｄ・Ｅのグリッドにまたがり，第４号竪穴住居跡の南西側に隣接して検出された長軸方位Ｅ―3°―Ｎ，長軸288cm，短軸88～117cm，深さ3.1～11.3cmを計測する不整方形と半楕円形が連結した形状を呈するプランの土壙である。プラン確認面での面積は2.78m²である。

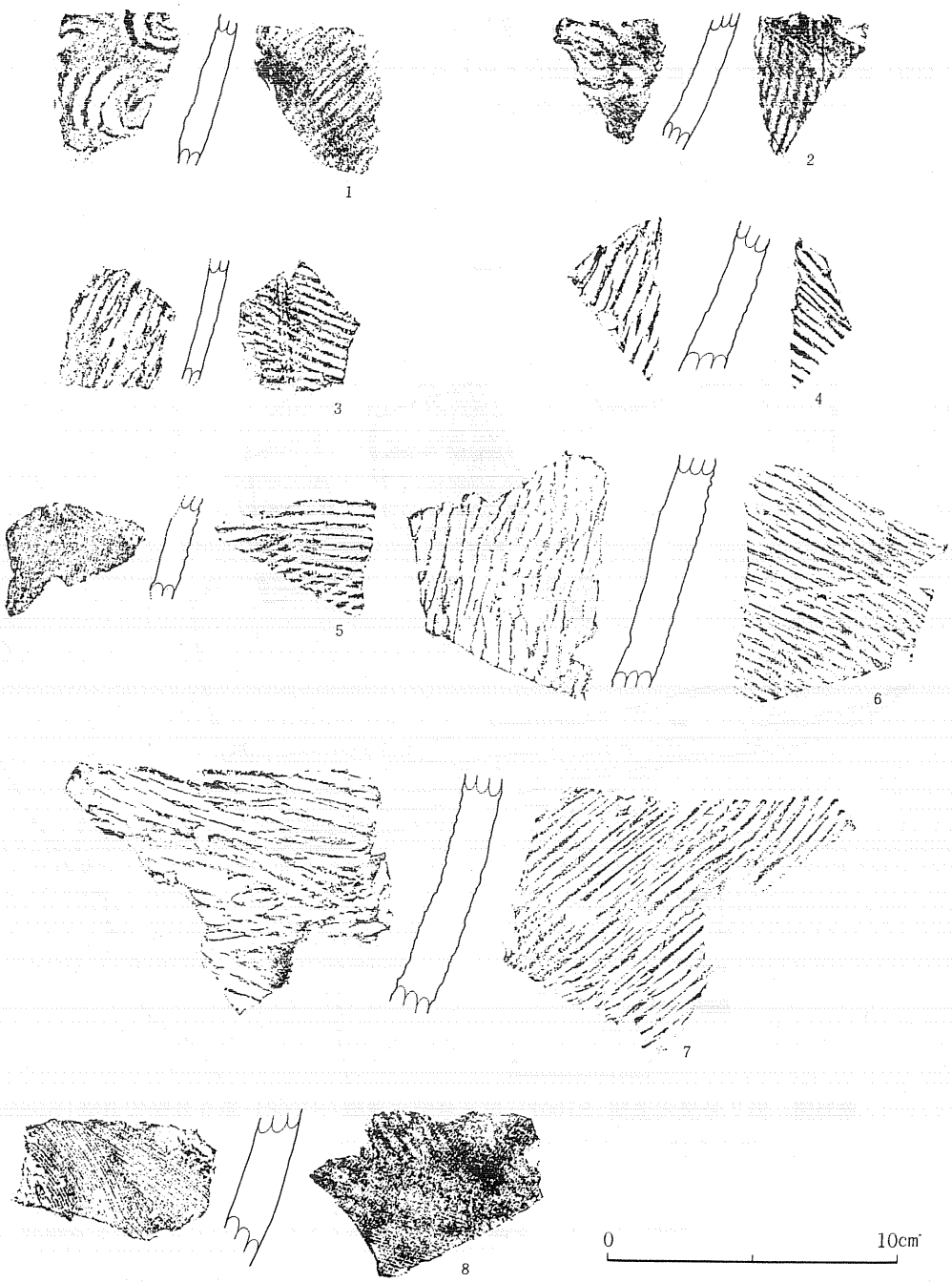
埋土は２層に分けられる。１：地山ローム混入褐色土　２：地山ローム混入暗褐色土

遺物は出土しなかった。

Ａ調査区グリッド出土遺物（第34図）

Ａ調査区の各グリッドでは，土師器，須恵器，陶磁器，鉄製品，鉄滓，フレイクなどが出土しているが，極めて少量で図化できる遺物は少ない。出土した須恵器等の拓影を第34図に掲載

した。１（14―Ｂ），２（15―Ｃ）は，器外面が平行叩目文，器内面の当て木痕が青海波文（あるいは同心円文）である。３（14―Ｄ），４（13―Ｂ），６（12―Ｂ），７（14―Ｄ）は，両面とも平行叩目文である。５（13―Ｄ）は器外面が叩目文であるが，器内面は当て木痕がみられない。

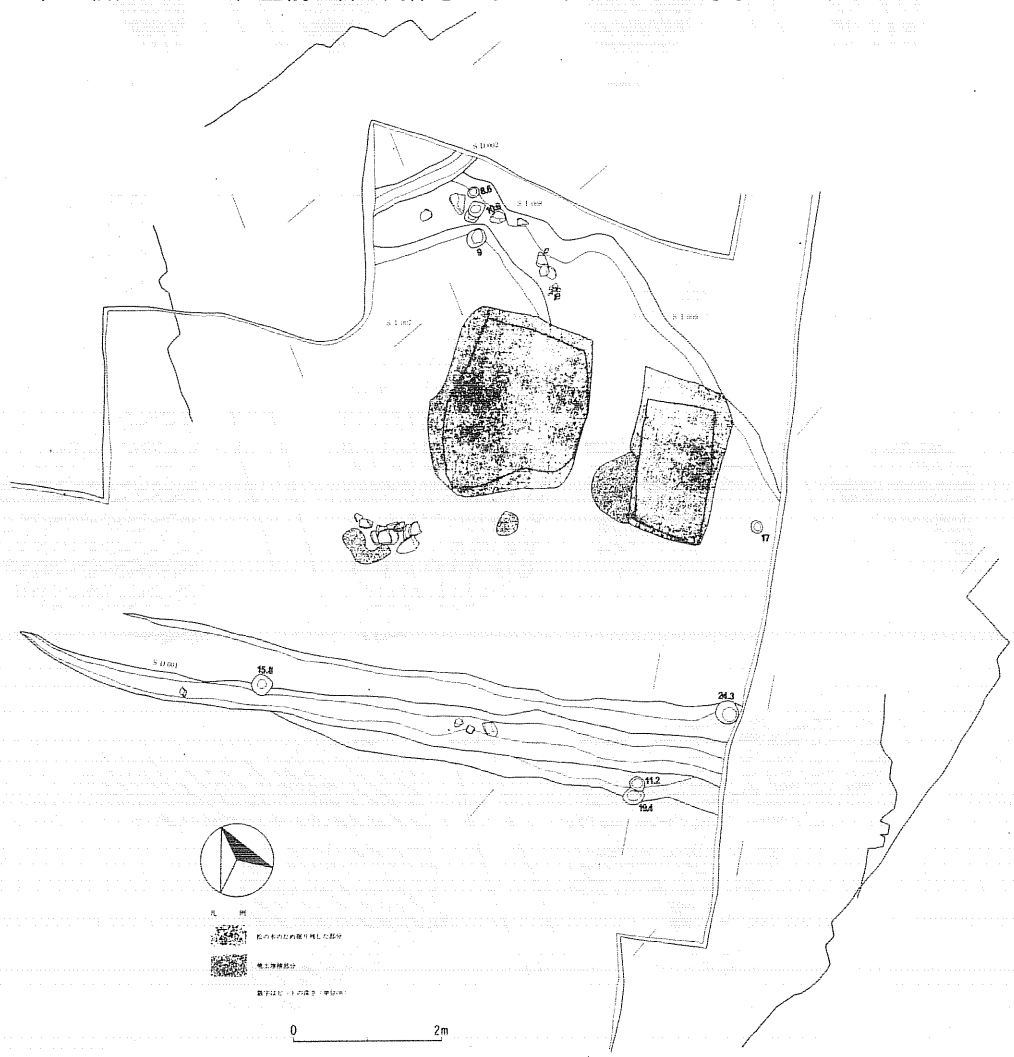


第34図　Ａ調査区グリッド出土須恵器等拓影図

８（14—Ｂ）は須恵器系の中世陶磁器片と思われる。

(2)　Ｂ調査区（第35図）

本調査区は尾根南西斜面にあり，腐植土が厚く堆積し，眼高直径30cm以上の松が伐採されないままになっており，これを伐採して，抜根すれば遺構を更に壊す可能性が強いことから立木をそのままにして調査した。その結果，溝状遺構２条（ＳＤ001・002），竪穴遺構３棟（ＳＩ007～009）が検出されたが，重複の新旧関係を明らかにすることはできなかった。

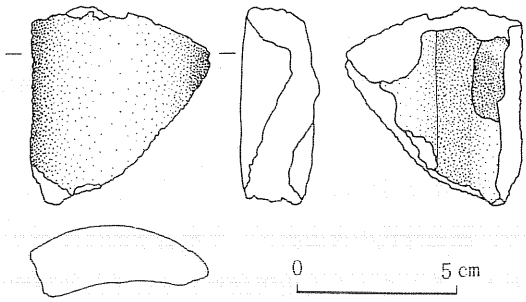


第35図　第７号竪穴遺構（SI007）・第８号竪穴遺構（SI008）・第９号竪穴遺構（SI009）・第１号溝（SD001）・第２号溝（SD002）実測図

第７号竪穴遺構（ＳＩ007）

54—Ｂ・Ｃグリッドで確認された。３棟の竪穴遺構のうち最も低いレベルで北東隅部分が確認されており，隅部下方には柱穴状ピットが穿たれている。現存する壁の高さは19.7～28.7cm

である。本遺構の床面上と予想される位置に自然石を配置した焼土とその南西部にも焼土が堆積しているのが確認された。自然石を配置した焼土部分からは，羽口片（第36図）・鉄製品・鉄滓が出土したが，鉄滓は鉄分が自然凝固したもので洗浄中に消滅した。



第36図　第７号竪穴遺構出土羽口実測図

第８号竪穴遺構（ＳＩ008）

54－Ｃグリッドで，第２号溝状遺構と第７号竪穴遺構に囲まれるように高さ25.5cmの東側壁の一部が確認されたのみである。第９号竪穴遺構と床面レベルが同一なため，遺構の範囲は明確ではない。床面には柱穴状ピットが穿たれ，その周囲の床面に自然石が散乱する。自然石以外に遺物は出土しなかった。

第９号竪穴遺構（ＳＩ009）

範囲確認調査No.11トレンチ内で「壁面（段差）と平坦面」としてその存在を確認していたが，その範囲が拡大して確認された。高さ19～36.2cmの東側壁面と北東隅部が確認されたのみである。床面は平坦で柱穴状ピット，焼土の堆積も確認されている。遺物は甕形土師器が１個体の他，甕形土師器破片が出土した。

第１号溝状遺構（ＳＤ001）

52－Ｃ，53－Ａ・Ｂ・Ｃの各グリッドにまたがり，斜面に直交するように地山ローム面に上幅13～152cm，深さ1.5～30.5，下底幅６～21cm，長さ982cm（調査区内確認部分の長さ）の溝が掘り込まれていた。底は２段を呈する。立ち上がりは腐植土の黒土化した部分まで確認できそうであったが，明確ではない。遺物は出土していない。

第２号溝状遺構（ＳＤ002）

54－Ｂ・Ｃグリッドで斜面を上下するように，上幅24～28cm，深さ4.8～13.5cm，下底幅13～15cm，長さ162cm（調査区内確認部分の長さ）の溝が地山ローム面に掘り込まれていた。

立ち上がりは地山ローム面上までしか確認できなかった。遺物は出土していない。

第５章　自然科学的分析調査

本遺跡第２号竪穴住居跡から検出された浅黄色シルト質火山灰とその火山灰の上面に貼りつくように散布していた細粒炭化材，および本遺跡から出土した須恵器について次の分析を実施した。

１．第２号竪穴住居跡内に堆積する火山灰層の上面に貼りついて散布する炭化材は，火山灰が，直接降下・堆積あるいは流入堆積したにしても時間差がわずかであり，放射性同位元素^{14}Cによる年代測定することは，火山灰の降下・堆積時期を知る手がかりの１つになると考え，木越邦彦教授に分析委託した。

２．第２号竪穴住居跡内に堆積する火山灰層については，本地域の調査では初見のものであり，歴史時代の火山灰として地質学的にばかりでなく考古学的にも重要な意味をもっと考えられた。そこでこの火山灰試料をそれぞれの研究方法・分析方法により研究されている４人の研究者に送付し，分析とコメントをお願いした。

(1)　工藤英美氏は，この地域の第四紀を研究しておられ，地形・地質にも詳しいことと現地で直接堆積状況を確認していただいていることから，地形・地質と当該火山灰についてコメントをお願いした。工藤英美氏のコメントは第２章遺跡の立地と環境，第３節土井遺跡付近の地形・地質として掲載させていただいた。

(2)　町田洋氏は，東北地方の火山灰の調査を続けており，1981年に「日本海を渡ってきたテフラ」（町田・新井・森脇）を『科学』51の中で東北北部と北海道地方に北朝鮮白頭山に由来するアルカリ岩質の火山灰が分布することを述べており，本遺跡の火山灰もその可能性があることから分析をお願いしたところ快諾され，分析結果とコメントをいただいた。

(3)　庄子負雄氏は，東北地方の火山灰の調査を続けており，秋田県内の小坂町はりま館，増田町平鹿遺跡，仙北町払田柵跡から検出された火山灰の分析をしており，本遺跡検出の火山灰が他３遺跡検出火山灰と対比した場合どうなのか分析をお願いしたところ快諾され，分析結果とコメントをいただいた。

(4)　三辻利一氏は，エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析法と放射化分析法をもって，胎土分析による古代土器の産地推定をなされている。この他に蛍光Ｘ線分析法による化学分析によって遺跡に堆積する火山灰の同定も行っており，隣県の青森県内の分析が既に実施されていることから，青森県内検出の火山灰と本遺跡の火山灰の化学特性分析で同定できるのではないかと考え，お願いしたところ，火山灰試料の分析を快諾され，分析結果とコメントをいただいた。

第１節　学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

秋田県埋蔵文化財センター殿　　1983年12月23日

木越邦彦

1983年９月12日受領致しました試料についての^{14}Ｃ年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお，年代値の算出には^{14}Ｃの半減期としてLibbyの半減期5570年を使用しています。また

付記した誤差はβ線計数値の標準偏差σにもとづいて算出した年数で，標準偏差（one sigma）に相当する年代です。試料のβ線計数率と自然計数率の差が２σ以下のときは，３σに相当する年代を下限とする年代値（B.P.）のみを表示してあります。また試料の，β線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差が２σ以下のときには，Modernと表示し，δ^{14}C％を付記してあります。

記

Code No.	試料	B.P.年代（1950年よりの年数）
Gak－11317.	Charred wood from Hachimori－machi.	1640±90
	Sample Code No.3 DI－SI002－CI－on P.F.	A.D.310

第２節　八森町土井遺跡第２号竪穴住居跡採取火山灰同定結果

1983年12月３日

町田　洋

結　論　「白頭山　苫小牧火山灰（B－Tm）」

データ

火山灰を構成するもの：ほとんどが軽石型およびバブル型の細粒火山ガラス

火山灰の屈折率　n_1　1.515～1.519

最大粒径　0.2mm

微量ながらアルカリ長石が認められる。その屈折率　n　1.523

測定者　新井房夫氏

こうしたデータからみると上記テフラと同定されます。B－Tmの噴出年代は未だ確定していません。いずれ高麗史を検討して結論を得たいと思いますが，11～13世紀の間に入ることだけは確実です。

第３節　土井遺跡の火山灰

1984年１月７日

庄子負雄・山田一郎

１．分析方法

一次鉱物組成分析用の試料は，火山灰全体の場合はそのまま篩で0.1～0.2mm部分を採取し，次いでテトラブロムエタン（比重2.96）で重鉱物部分と軽鉱物部分に区別した。軽石部分の分析用試料ははじめに分離した軽石を軽く粉砕した後，火山灰の場合と同じように重鉱物と軽鉱物の２つの部分に分けた。各部分の鉱物組成は，それぞれ200～300粒検鏡し，その結果を粒数

%でしめした。

第２表　一次鉱物組成（粒数%）

試料名	重鉱物組成				軽鉱物組成					重鉱物含量（重量%）
					火山ガラス（形態別）				長石	
	シン輝石	普通輝石	角閃石	磁鉄鉱	スポンジ	扁平	繊維	顆粒		
土井遺跡の火山灰	38	7	15	39	23	65	7	4	1	3
苫小牧火山灰	64	6		29	26	62	10		2	3
大湯浮石全体	37	9	3	52	3	6	1以下	66	26	9
同上軽石部分	43	2		55	78	1	11	1	9	6

火山ガラスの形態はスポンジ状・繊維状・扁平状・顆粒状の４種に区分した。スポンジ状は無色で鋭角な多数の突起をもつガラスであり，内部に小気胞の多いものから少ないものまで含めた。繊維状ガラスは無色であたかも繊維が束状になったようにみえるものである。扁平状ガラスは無色で扁平であり，スポンジ状や繊維状ガラスより厚みがある。顆粒状ガラスは茶褐色から黒褐色であり，多数の微晶を有する角塊状のガラスである。

第３表　粒径組成（重量%）

礫（２mm以上）	粗砂（２—0.2mm）	細砂（0.2—0.02mm）	シルト（0.02—0.002mm）	粘土（0.002mm以下）
極少	2	46	11	41

土井遺跡の火山灰試料の粒径組成は，試料10ｇをとり，６%H_2O_2で有機物を除いた後，超音波処理を行い，0.2mm以上は篩別法で，0.2mm以下の部分はピペット法で決定し，その値は各粒径の重量%でしめした。

２．分析結果

土井遺跡中に認められた火山灰に対応する可能性のある既知の火山灰は十和田—ａ，大湯浮石，苫小牧火山灰である。このうち，十和田—ａはその分布域からみて土井遺跡には分布していないと考えられる（大池1972，町田・新井・森脇1981）。従って，土井遺跡の火山灰は大湯浮石か苫小牧火山灰またはまだ知られていない火山灰のいずれかである。

第２表には土井遺跡の火山灰（第２号竪穴住居跡ＳＩ002の内部に堆積していた火山灰），苫小牧火山灰（採取地，青森県上北郡十和田町ソデカ谷地），大湯浮石（採取地，秋田県鹿角郡小坂町はりま館遺跡，試料No.ＴＷ35，No.１，ＭＢ75～ＭＤ75第６層）の一次鉱物組成をしめした。

土井遺跡の火山灰の重鉱物組成は磁鉄鉱≒シソ輝石＞角閃石＞普通輝石であり，その含量は３%と少ない。これらの鉱物中，両輝石，角閃石のかなりの粒子がその表面がやや風化している。とくに角閃石は風化に対する抵抗性が強い鉱物であり，1000年程度の年代ではほとんど風

化を受けていないのが普通である。一方，軽鉱物組成は火山ガラスが圧倒的であり，形態別では，扁平状が大部分で，次いでスポンジ状である。

苫小牧火山灰は十和田―aや大湯浮石よりも年代のやや新しい火山灰である（町田・新井・森脇1981)。その重鉱物含量は3％と少なく，内容はシソ輝石が大部分で，ついで磁鉄鉱，普通輝石の順である。軽鉱物組成は火山ガラスが圧倒的で極少量の長石が含まれている。火山ガラスの形態は扁平状が大部分であり，次いでスポンジ状，繊維状である。

大湯浮石の火山灰全体の重鉱物含量は9％で，その組成は磁鉄鉱＞シソ輝石≫普通輝石＞角閃石である。軽鉱物組成は火山ガラスが大部分であるが長石も26％とかなり含まれている。火山ガラスの形態は顆粒状のものがほとんどである。

大湯浮石の軽石部分についてみると，重鉱物含量は6％，その組成は磁鉄鉱＞シソ輝石≫普通輝石である。軽鉱物組成は火山ガラスが圧倒的であり，そのうちスポンジ状ガラスがほとんどである。

以上のことからみて土井遺跡の火山灰は大湯浮石とは，とくに軽鉱物組成がまったく異なっており，両火山灰は異なるものである。

次に土井遺跡の火山灰と苫小牧火山灰との関係は，その重鉱物含量，軽鉱物組成が極めて類似している。しかしながら重鉱物組成は，とくに角閃石の有無に違いがある。

先述したように土井遺跡中にみられた重鉱物とくに角閃石は，1000年程度の年代の火山灰にしては表面の風化が進んでおり，土井遺跡の火山灰試料は，火山灰と他の土壌との混合した試料である可能性が考えられる。このことは，表2にしめしたこの火山灰試料の粒径組成の結果そして0.2㎜以上部分の観察からも明らかである。この試料の粒径組成をみると細砂部分が46％，粘土部分は41％と2つの山ができ，この試料が火山灰と他の土壌の混合物である可能性が非常に強いことをしめしている。また，0.2㎜以上部分には，苫小牧火山灰の同粒径部分には認められない風化した岩片が多く認められる。以上のことから，土井遺跡の0.1―0.2㎜部分の重鉱物とくに角閃石のかるい部分は他の土壌のものと考えられる。従って，土井遺跡の火山灰の重鉱物組成と苫小牧火山灰のそれとを比較することはできない。一方，軽鉱物部分は火山ガラスが両試料とも圧倒的であり，軽鉱物部分，とくに火山ガラスの形態を比較することは有意義である。さらに，土井遺跡の火山灰中の火山ガラスの形態は，町田らが示した苫小牧火山灰の火山ガラスと形態（町田・新井・森脇1981）が一致している。

以上のことからみて，土井遺跡の火山灰は苫小牧火山灰であると思われる。

参考文献

大池昭二（1972)，十和田火山東麓における完新世テフラの編年，第四紀研究11，228―235。

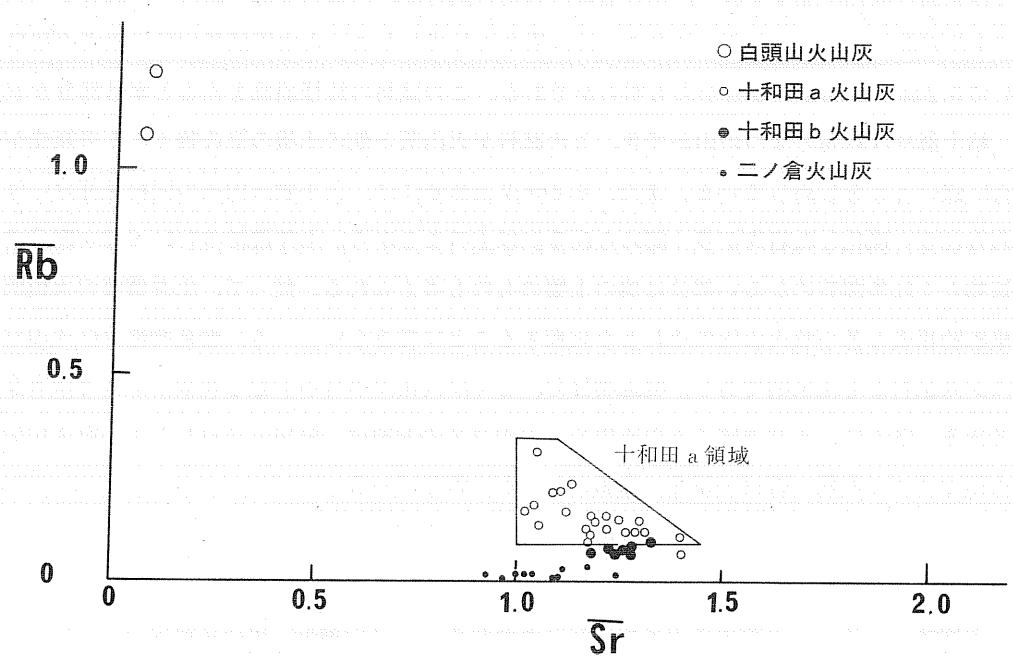
町田洋・新井房夫・森脇広（1981)，日本海をわたってきたテフラ，科学51，562～569。

第４節　土井遺跡出土火山灰の蛍光Ｘ線分析

三辻利一

東北地方の遺跡からはしばしば火山灰が検出される。これらの火山灰を同定することができれば遺跡の年代を推定する上に役立つ。これらの火山灰のうち，十和田ａ，十和田ｂ，二ノ倉，白頭山火山灰の相互識別は蛍光Ｘ線分析法でも容易にできることがこれまでの研究の結果，判明した。これらのデータを使って，土井遺跡および，秋田県下の２～３の遺跡出土火山灰を同定した結果について報告する。

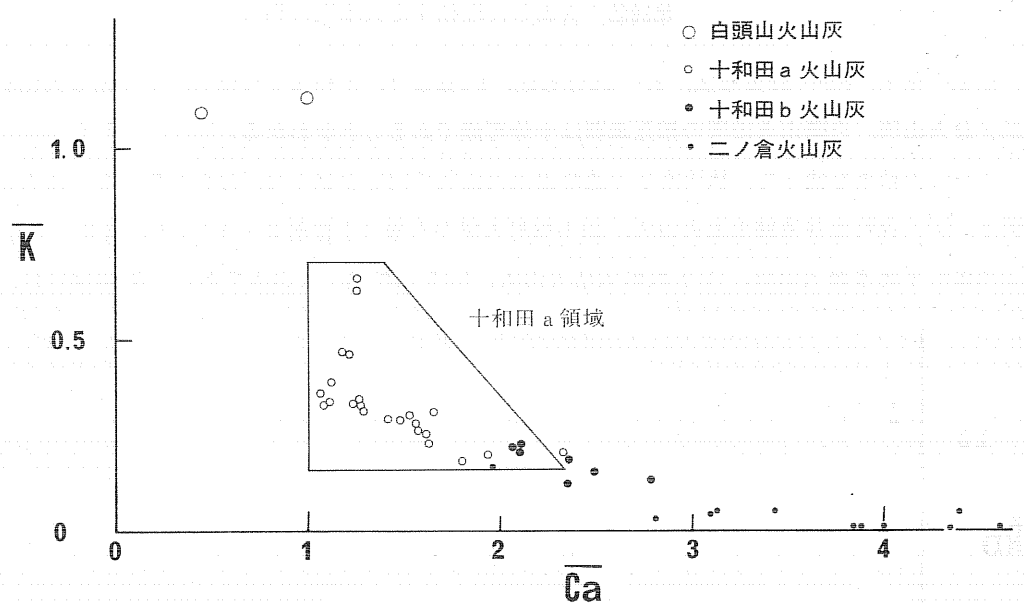
現地で採集された火山灰は実験室に持ち帰って，空気乾燥器の中で110℃前後で数時間乾燥したのち，タングステンカーバイド製乳鉢で200メッシュ程度に粉砕された。粉末試料は15トンの圧力をかけて直径２cmのコイン状のペレットに成形し，Ｘ線を照射した。蛍光Ｘ線分析にはエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置が使用された。エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析では，火山灰中のＫ（カリウム），Ca（カルシウム），Fe（鉄），Rb（ルビジウム），Sr（ストロンチウム）が容易に分析される。Ｋ，Caの分析には真空下で，２次ターゲットとしてTiを使用した。また，Fe，Rb，Srの分析には空気下で２次ターゲットとしてMoを使用した。定量分析には標準試料として岩石標準試料ＪＧ－１を使用した。分析データはＪＧ－１による規格化値で表示された。



第37図　青森県に堆積する火山灰のRb—Sr分布図

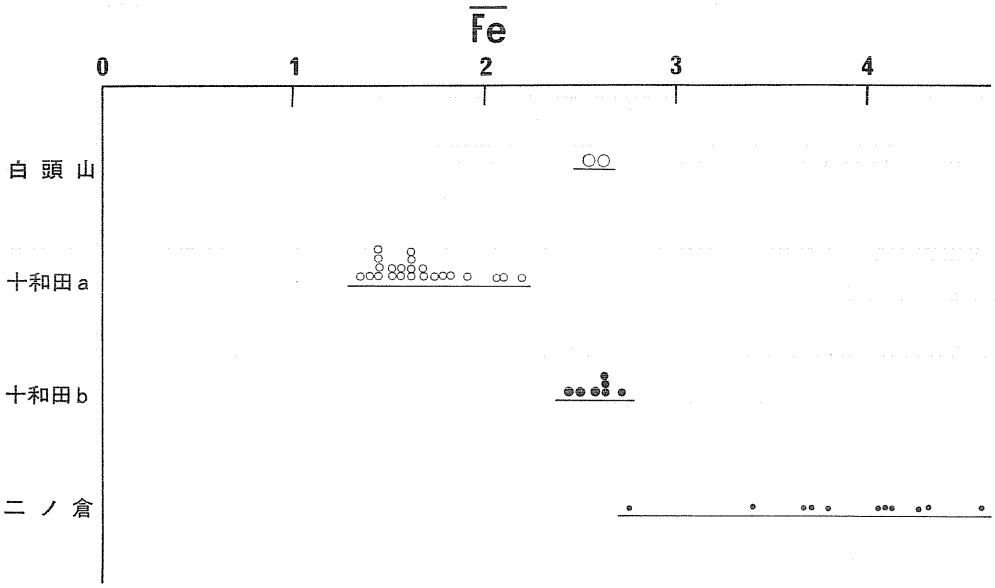
はじめに，既に他の方法で同定されている火山灰，または，層序学的に同定が明確にできる火山灰を分析し，これらの化学特性を把握しておかなければならない。十和田a，十和田b，二ノ倉，白頭山火山灰のRb—Sr分布図を第37図に示す。白頭山火山灰はRb量が多く，Sr量が少ないという特徴をもつのに対し，十和田a，十和田b，二ノ倉などの十和田火山活動による火山灰はRb量が少なく，Sr量が多いという対照的な特徴があることが分かる。さらに，十和田系火山灰でも，十和田a，十和田b，二ノ倉と降下年代が古くなるほどRb量が少なくなる傾向があることが分かる。

第38図には，これら火山灰のK—Ca分布図を示す。K—Ca分布図でも白頭山火山灰はK量が多く，Ca量が少ないのに対し，十和田系火山灰にはK量が少なく，Ca量が多いという対照的特徴があることが分かる。さらに，十和田系火山灰でも十和田a火山灰はK量がもっとも多く，Ca量がもっとも少ない。逆に，二ノ倉火山灰はK量がもっとも少なく，Ca量がもっとも多い。そして，十和田b火山灰はその中間に分布することが分かる。



第38図　青森県に堆積する火山灰のK—Ca分布図

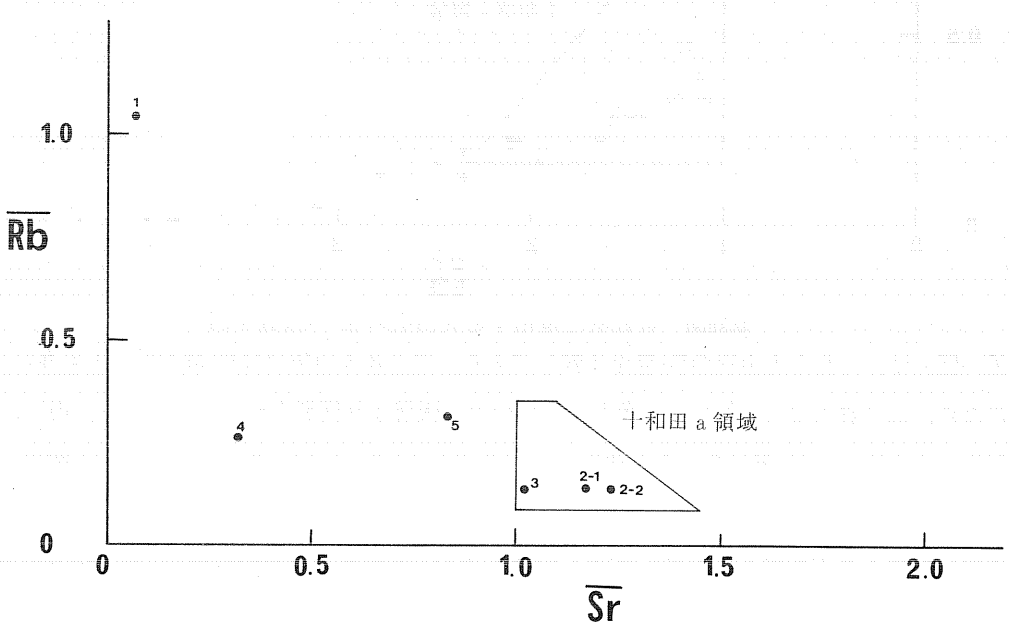
第39図には，これら火山灰のFe量を比較してある。二ノ倉火山灰にはFe量がもっとも多い。そのため，二ノ倉火山灰は外見上も色黒く，他の火山灰層より区別されることもある。逆に，十和田a火山灰にはFe量はもっとも少ない。十和田b火山灰にはFe量はやや多く，十和田a火山灰と二ノ倉火山灰の中間程度のFe量を含む。十和田b火山灰が青バンと俗称されるのもその上位に分布する十和田a火山灰に比べてFe量が多いことに起因するのだろう。白頭山火山灰は十和田b火山灰と同程度のFe量を含む。



第39図　青森県に堆積する火山灰のFe量

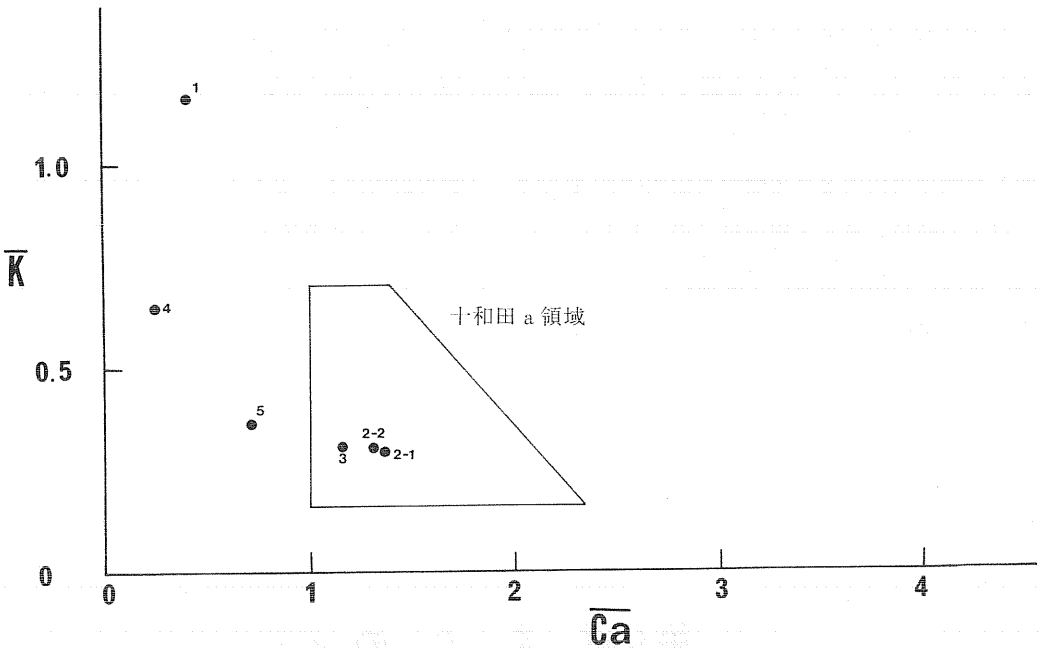
以上の結果，Rb－Sr分布図，K－Ca分布図，Fe量より，十和田ａ火山灰，十和田ｂ火山灰，二ノ倉火山灰，白頭山火山灰の相互識別は十分可能であることがわかる。

これらの結果を使って，秋田県下の遺跡出土火山灰の同定を試みた。分析対象となった火山灰は，(1)八森町土井遺跡出土火山灰，(2)小坂町大湯浮石層（上位層２－１）（下位層２－２），(3)増田町平鹿遺跡火山灰，(4)小坂町大岱火山灰，(5)払田柵出土火山灰である。第40図には，



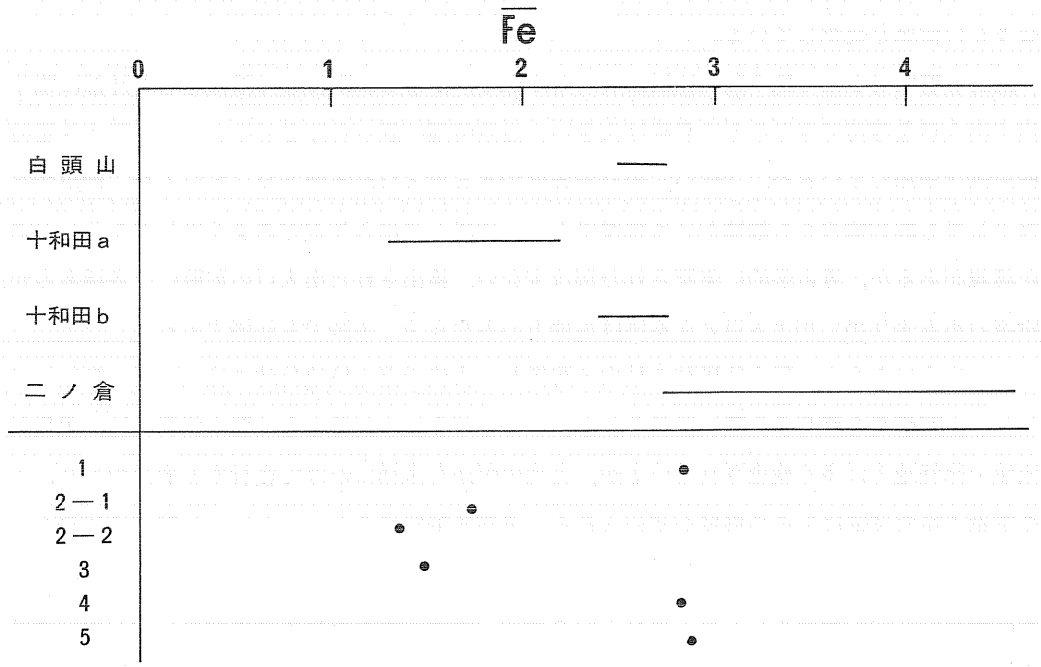
第40図　秋田県内遺跡出土火山灰のRb－Sr分布図

これら火山灰のRb－Sr分布図を示す。土井遺跡出土火山灰は白頭山火山灰領域に，また，大



第41図　秋田県内遺跡出土火山灰のＫ－Ca分布図

湯浮石層と平鹿遺跡出土火山灰は十和田ａ火山灰領域に分布した。しかし，大岱火山灰と払田



第42図　秋田県内遺跡出土火山灰のFe量

柵の火山灰はどの火山灰領域にも対応しない。第41図には，K－Ca分布図を示す。この分布図でも第40図と同じ結論が得られることが分かる。第42図にはFe量を示してある。Rb－Sr，K－Ca分布図で白頭山火山灰と一致した土井遺跡出土火山灰はFe量でも白頭山火山灰に対応する。また，Rb－Sr，K－Ca分布図で十和田a火山灰に対応した大湯浮石層，平鹿遺跡火山灰はFe量でも十和田a火山灰に対応した。一方，Rb－Sr，K－Ca分布図でどの火山灰にも対応しなかった大岱火山灰と払田柵の火山灰はFe量では二ノ倉火山灰にもっとも近いことが分かった。

以上の結果，蛍光X線分析で得られるすべての因子から，土井遺跡出土火山灰は白頭山火山灰，また，大湯浮石層，平鹿遺跡出土火山灰は十和田a火山灰と判定された。しかし，大岱火山灰と払田柵の火山灰はどの火山灰に相当するのか判定できなかった。これらが白頭山火山灰や十和田系火山灰以外の火山灰であるのか，それとも，2次堆積した火山灰であるためコンタミが著しく，そのため化学特性が著しくくずれてしまった火山灰であるのかよく分からない。この問題は今後の宿題である。こうして，土井遺跡出土の火山灰は白頭山火山灰であることが分かった。

第6章　ま　と　め

第1節　遺　構

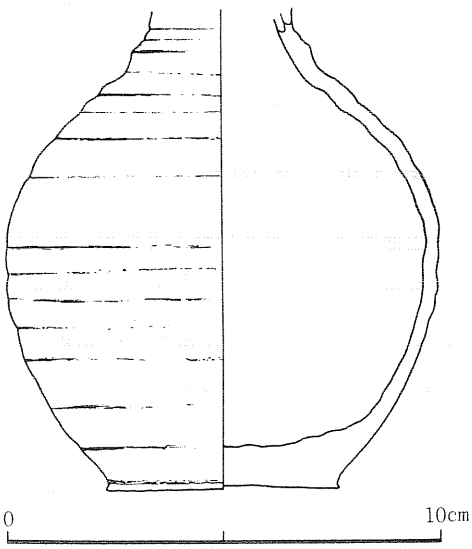
A調査区の6棟の竪穴住居跡は，古代の当地方の竪穴住居跡の上部構造を研究する上で有効な多くの情報を提供している。

全容を解明できた4棟の竪穴住居跡のうち3棟で，かまどに隣接して階段をもち外部に張り出す出入口を確認できたことの意味は大きい。当該時期に限ったことではないが，竪穴住居跡検出例は増加しているが，「住い」の必須条件である出入口が不明となっているか，検出できたとしても数10棟のうち数棟という程度である。住居への出入りがどのようにしてなされたのか諸説があるが，考古学的に実証された例は少ない。検出された出入口の形態には各種あるが，階段のある張り出しが出入口となる例は当地方のみならず，本県でも初例である。

この出入口を有する竪穴住居跡の柱穴の配置が，古代の掘立柱建物跡の柱穴配置に類似しており，上部構造を研究する際に注目される。このような柱穴配置をもつ竪穴住居跡は，米代川流域・津軽地方に多く検出されているが，古代中頃から末期にかけて盛行する形態であり，また中世の竪穴遺構にもその継続が認められる。全容を解明できなかった第4号竪穴住居跡あるいは第6号竪穴住居跡の壁下を巡る溝内の小さな楕円形のくぼみ列の検出は，「周溝」と名称され排水のための施設として考えられている溝が，壁体である板材をおさめる穴のための溝状の掘り方であり，「壁溝」と名称すべきものであることを示している。柱穴配置も出入口のあ

る竪穴住居跡と同じであることから，第2号～第6号竪穴住居跡は，軒高な上部構造を想定できる。

B調査区の遺構は，その地形と遺構配置，形態から，青森県黒石市高館遺跡の館跡斜面にて検出された遺構に類似している。調査面積が狭いので周辺の調査を待たなければならないが，下方に広がる小さな段状地形と尾根を利用した館跡の可能性もある。遺物が僅少なため，不明確ではあるが，古代の城柵官衙に本拠をもつ律令体制派と対峙する所謂蝦夷の砦的性格をもつ「館跡」と考えるならば，A調査区の竪穴住居跡群と関連して考えることができる。また第43図の須恵器がすぐ近くの畑から出土していることも考えると，遺跡の範囲はかなり広大であると思われる。



第43図　表採細頸壺形須恵器実測図

第2節　遺　物

本遺跡から出土した遺物のうち，土師器・須恵器については，その出土状況，共伴関係を踏まえて検討しなければならないが，米代川上流域の鹿角地方の土器様相に非常によく似ている。

本遺跡では伴出関係に問題を残すが，3点出土した鍋形土師器は，その出現と分布範囲が本遺跡でも数点出土している底部に砂粒を付着させる甕形土師器と同じく，青森県津軽地方を中心とし，岩手県北部北上川上流域と秋田県米代川上流域までであり，10世紀半ばを中心とする時期である。（この器形の出現する背景には雑穀食を想定する考えもあるが，焼畑耕作が行なわれていたことを実証する雑穀が出土しない限り困難である。）

坏形土師器には，轆轤を使用し，切り離し後に調整を全く加えない個体が多い。所謂赤焼土器，赤褐色土器，須恵系土器と呼ばれているような土器である。

須恵器では，壺形土器以外の器種，特に坏形土器が皆無であることに注目したい。

出土した須恵器の胎土分析による産地推定は，奈良教育大学三辻利一教授の御厚意により行なわれ，12—Cグリッドと14—Aグリッド出土の大形壺底部破片，15—Cグリッド出土の器表平行叩目文，器内同心円文の当て具痕のある大型壺胴部破片，第5号竪穴住居跡かまど煙道部出土大型壺形須恵器の計4点は横手市物見窯産の可能性が強く，21—Cグリッド出土の大型壺底部破片は県外からの搬入物，第6号竪穴住居跡出土の大型壺口縁部破片と小型壺は珠洲焼と同定されている。

三辻教授からは，県内14窯跡の詳細なデータ及び玉稿を提供されたが，これについては紙数の都合上別の機会に明らかにしたい。

旧石器は，範囲確認調査時に出土したのみであったが，本地域でも今後出土が期待される。

第3節　火山灰

本遺跡では，第2号竪穴住居跡と第4号竪穴住居跡内で降下火山灰が確認され，町田洋氏，庄子貞雄・山田一郎氏，工藤英美氏，新井房夫氏，三辻利一氏の分析で日本列島を噴出源とする火山灰ではなく，朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の白頭山を噴出源とする苫小牧火山灰（B—Tm）と結論づけられた。遺跡から出土した火山灰が「苫小牧火山灰」と分析されたのは県内では本遺跡が初めてのことである。県内で遺跡から火山灰が検出された例としては，鹿角市内の菩提野竪穴群，北の林II，一本杉，妻の神III，中の崎遺跡等にみられる十和田火山起源の大湯浮石，増田町平鹿遺跡にみられる灰白色火山灰にすぎないが，共伴する土器の年代観から大湯浮石と灰白色火山灰はともに10世紀前半頃と推定されつつある。北の林II，一本杉，中の崎の各遺跡には明らかに大湯浮石堆積後に構築された竪穴住居跡があり，その出土土器は，本遺跡出土の土器と大差ないものである。このことから県北東部に大湯浮石が降下・堆積した後に本遺跡の第2号竪穴住居が構築され，廃棄後に白頭山・苫小牧火山灰が降下・堆積したと考えることができよう。本遺跡から約20km南下すると能代市上の山II遺跡が所在するが，この遺跡でも白頭山・苫小牧火山灰が確認されており，現在のところ上の山II遺跡が当該火山灰の分布南限となっている。

さて，この火山灰がいつ頃第2号竪穴住居跡に堆積したかという問題については，火山灰層上に散在する炭化材による絶対年代測定が行なわれ，1640±90（A.D.310）という年代が与えられたが，出土土器による竪穴住居跡の年代観よりも，かなり古い年代を示している。試料とした炭化材が果たして火山灰と同時期のものであったかどうかという分析以前の問題を再検討しなければならない。

第4節　成果と課題

薬師山・母谷山等の西向き尾根に見られる小さな段状地形は，現在畑として耕作されているため，近世の開墾による削平と考えられていたが，A調査区第4号竪穴住居跡の切り込み面確認過程で，遅くとも平安時代には既に段状の地山面上に黒色土が厚く堆積していたことを明らかにできた。

遺跡西方に広がる段丘面よりも上方に小さな段状地形が連続することは，人為的な削平による地形ではなく，浸食・開析による自然地形ではないかと考えられる。この小段状地形の形成

時期については地質的な研究を待たなければならないが，遺構検出が地質学的分野に大きな成果と課題を残したと考えられる。

本遺跡の発掘調査で得られたデータは前章までに述べてあるが，3棟の竪穴住居跡で張り出し出入口が検出されたことと，火山灰の検出は大きな成果である。

多くの遺跡で竪穴住居跡が検出され，住居構造について数多く論考されているが，住居であり，屋根と四囲を覆う以上，出入口が必ずつけられなければならないはずが，このことを忘れて構造を論じているのが多い。東北北部で当該時期の竪穴住居跡で出入口を検出したのは青森県三内遺跡H—44号竪穴住居跡が初例で，以後，増加しつつあるが，いずれも張り出しやスロープを持つことから確認されたものである。

火山灰については前章で詳しいレポートがあるが，火山灰試料と言えば従来ビニール袋に採取して，鉱物組成や火山ガラスの屈折率の測定用試料としての採集・保存であった。しかしこれはあくまで地質学的な試料であり，考古学が本来求める，直接的降下堆積か，あるいは二次的な堆積かについての分析データは得ることは出来ない。現場での堆積状況確認の他に堆積状況を考古学なデータ獲得のための試料採取が是非必要である。本調査では「土層転写」法による堆積状況をそのまま剝ぎ取り保存することになったが，この方法は，堆積状況を追体験することができて有効である。

本調査では，発掘調査の方法も含め本遺跡の詳細な分析とともに他遺跡とのより詳細な比較検討をする必要があり今後の課題としたい。

参考文献

文化財保護委員会　1953　『大湯町環状列石』埋蔵文化財調査報告第2集

桜田　隆　1978　『青森市三内遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第37集

桜田　隆　1982　「底部に砂粒を付着させる甕形土師器について」『日本考古学協会昭和57年度総会研究発表要旨』

秋田県教育委員会　1982　「北の林II遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ』

三辻利一　1983　『古代土器の産地推定法』考古学ライブラリー14

秋田県教育委員会　1983　「一本杉遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ』

秋田県教育委員会　1983　『平鹿遺跡発掘調査報告書』

秋田県教育委員会　1984　「中の崎遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ』

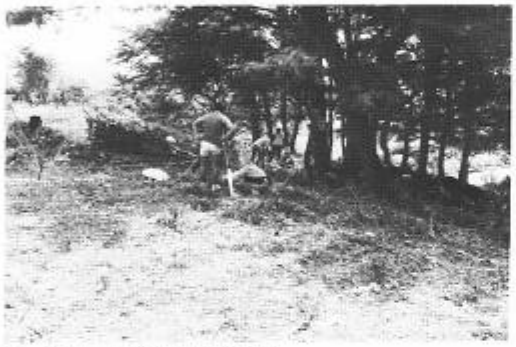
秋田県教育委員会　1984　「妻の神III遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅸ』

秋田県教育委員会　1984　「上の山II遺跡」『此掛沢II遺跡・上の山II遺跡発掘調査報告書』

図版1　遺跡付近航空写真（アジア航測㈱提供）

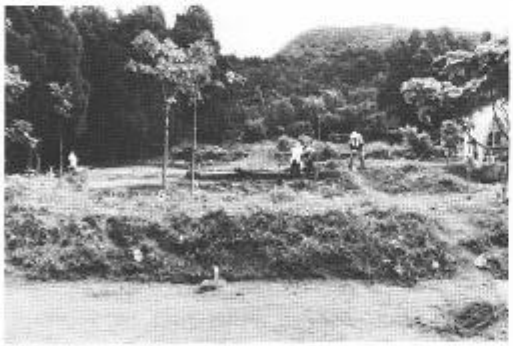
1 遺跡遠望（北側鹿の浦から）
遺跡の前面には段丘・沖積平野・日本海が広がる。
後背には薬師山・母谷山（中央部）がそびえる。

2 遺跡遠望（西側から）
薬師山から海に向って延びる尾根の南斜面に遺跡が立地する。



3 グリッド設定作業状況

4 粗掘り作業状況

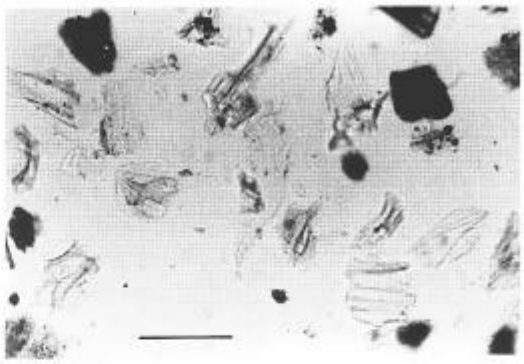


5 粗掘り作業状況

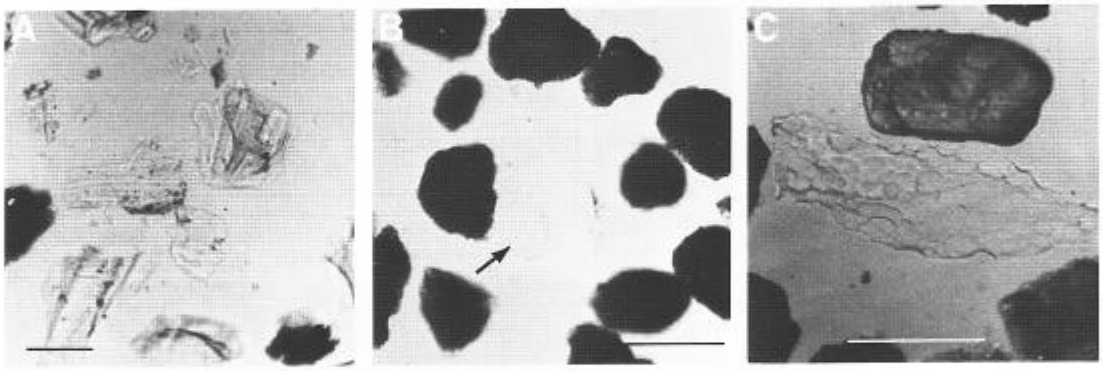
6 精査作業状況

図版 2　遺跡遠望・作業状況

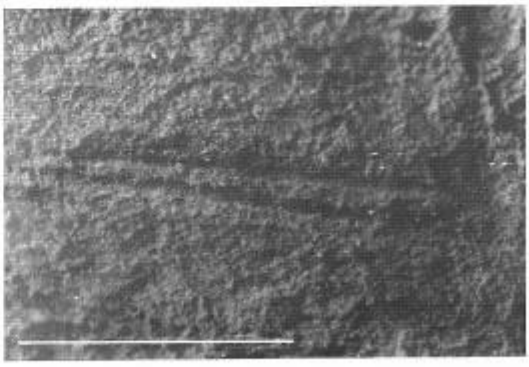
3－1
火山灰から検出された火山ガラス（半透明の鉱物）
スケールは 0.2mm



3－2
火山ガラスの形態のいろいろ
（A：繊維状　B：扁平状　C：苫小牧火山ガラス以外のもの）
スケールはいずれも 0.2mm。Bの矢印は扁平状火山ガラス



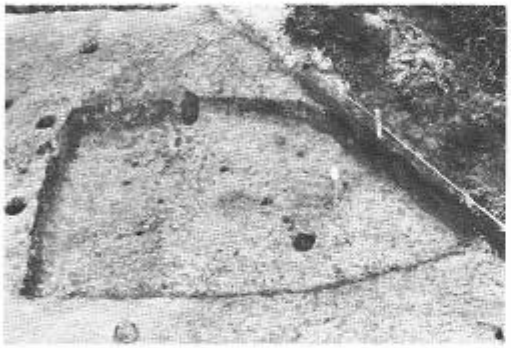
3－3
火山灰層中の流理構造
スケールは 1 cm
（双眼実体鏡で撮影）



図版 3　火山灰（第 2 章第 3 節参照）

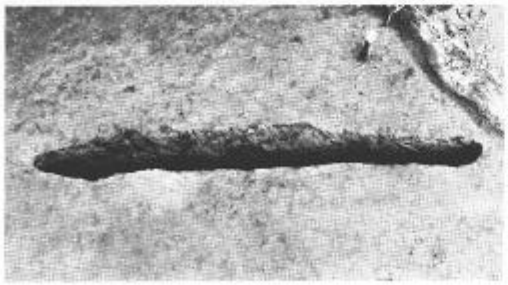
1第１号竪穴住居跡〔ＳＩ001〕プラン確認状況

2 第１号竪穴住居跡礫出土状況



3
第１号竪穴住居跡完掘状況

4
八森小学校五年生遺跡見学風景

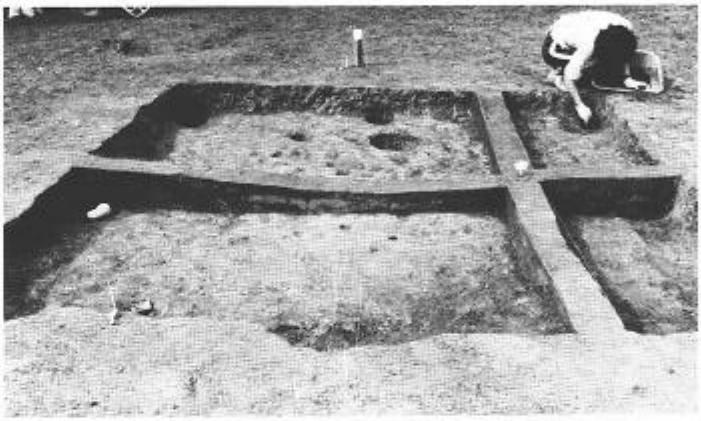


5
第１号溝状土壙〔ＳＫ（Ｔ）001〕完掘状況

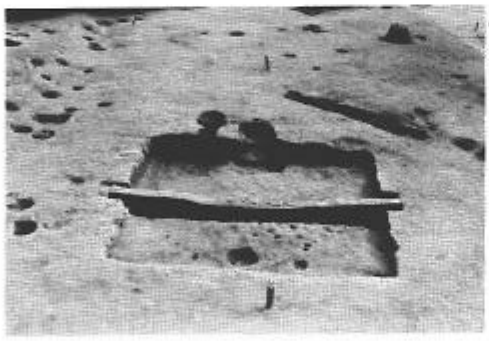
図版４ 検出された遺構(1)

1
第２号竪穴住居跡（Ｓ１002）
内降下火山灰堆積状態（範囲）

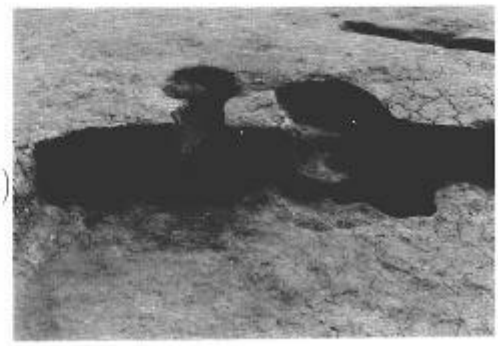
2 第２号竪穴住居跡内降下火山層堆積後投・廃棄された坏形土師器の出土状況



第２号竪穴住居跡内降下火山灰堆積状態（断面）
（この写真の撮影後、保存のため土層転写を実施した。）
3

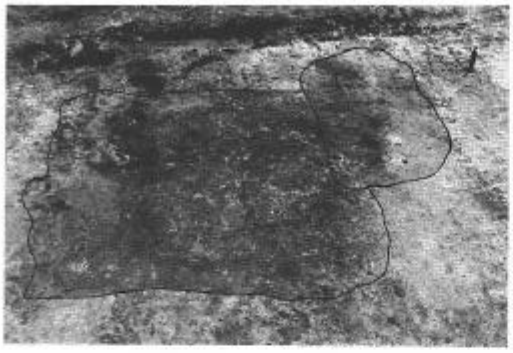


4
第２号竪穴住居跡完掘状況（土層観察用ベルト残存）



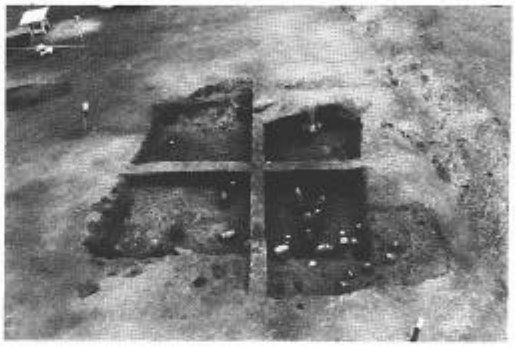
第２号竪穴住居跡　南側壁付設物
（壁面中央部に階段のある張り出し出入口があり、その東側に所謂トンネル式煙道部を有する東北型かまどがある。）

図版５　検出された遺構(2)



1
第３号竪穴住居跡（ＳＩ003）と第２号土壙（ＳＫ002）のプラン確認状況

2
第３号竪穴住居跡と第２号土壙の遺物出土状況



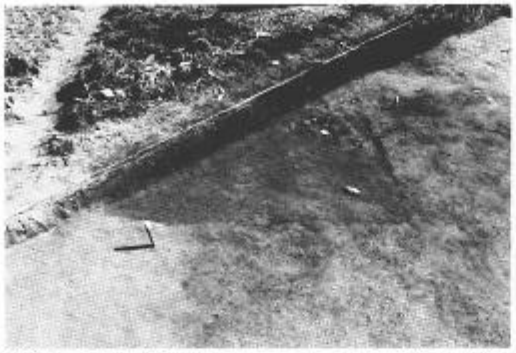
3 第３号竪穴住居跡と第２号土壙の完掘状況

4

第３号竪穴住居跡かまど（左袖側から）

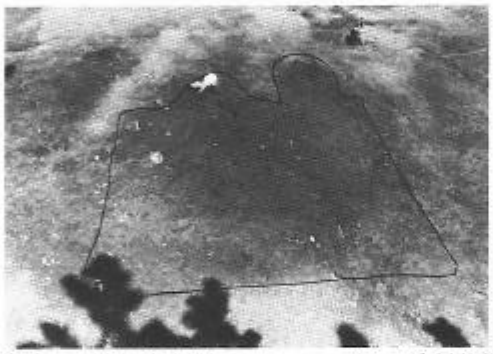
5
第３号竪穴住居跡かまど（正面から）

図版６　検出された遺構(3)



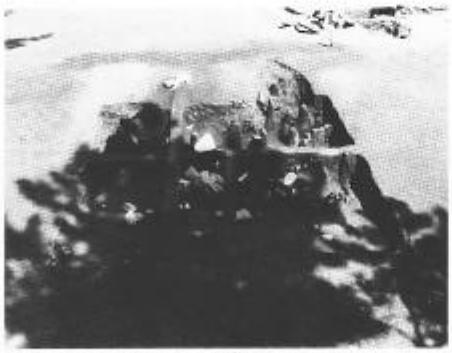
1 第4号竪穴住居跡（S I 004）プラン確認状況

2 第4号竪穴住居跡完掘状況



3 第5号竪穴住居跡（S I 005）プラン確認状況

4 第5号竪穴住居跡調査状況



5 第5号竪穴住居跡遺物出土状況

6 第5号竪穴住居跡完掘状況

図版7　検出された遺構(4)

1
第６号竪穴住居跡（ＳＩ006）と
第３号土壙（ＳＫ003）の完掘状況

2第６号竪穴住居跡かまど全景（正面から）

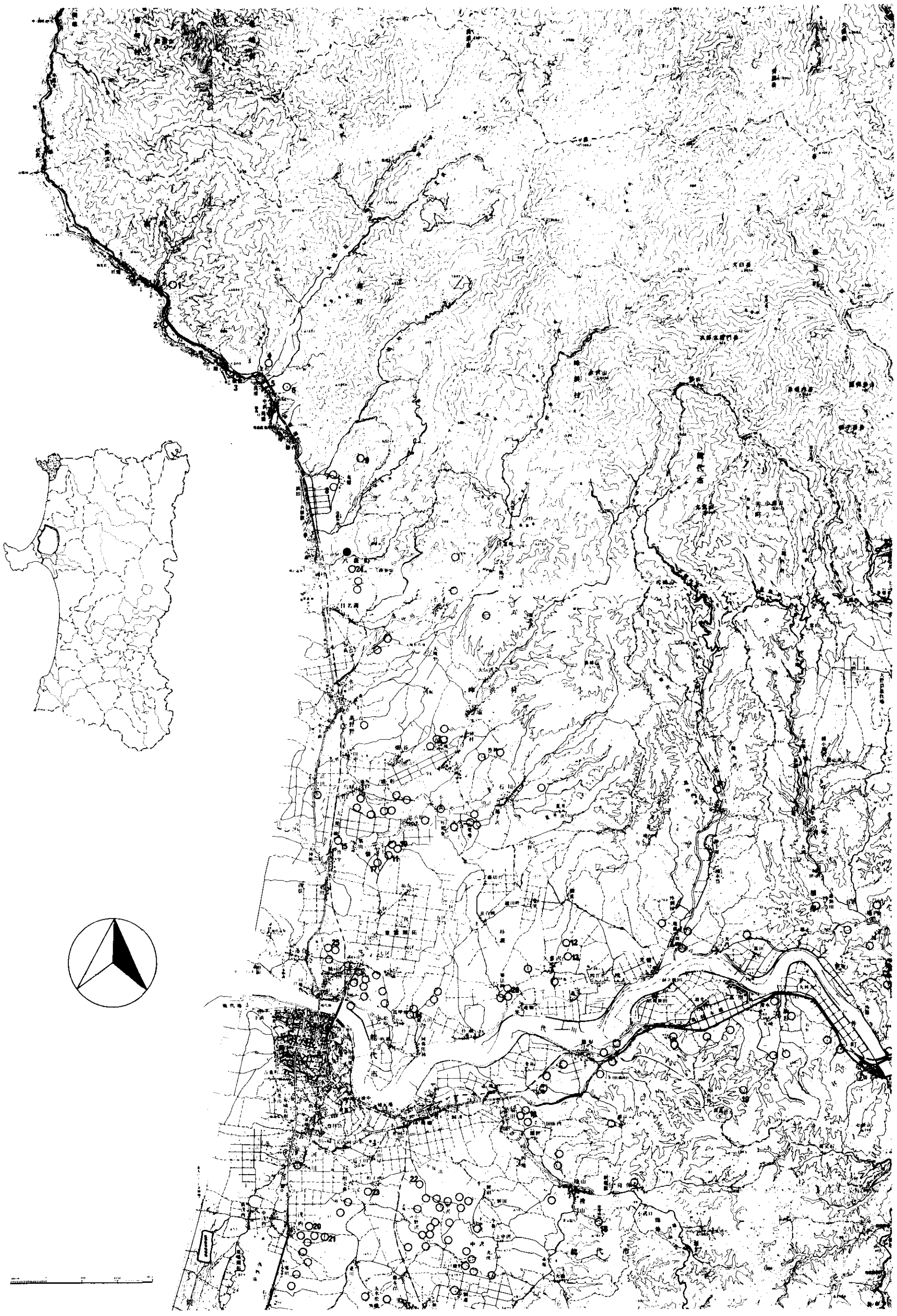
3第６号竪穴住居跡かまど石材配置状況
（左横側から）

4
旧石器探査用トレンチ

5Ａトレンチ精査状況

6Ｂトレンチ設定状況

図版８　検出された遺構(5)



第1図　周辺の遺跡（黒丸……土井遺跡）